

具象化する「中国」

—— 日本国立民族学博物館における中国民具の調査・蒐集・展示 ——

余 瑋

Yu Wei

非文字資料研究センター 2022 年度奨励研究採択者
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】 日本国立民族学博物館（以下、民博 Minpaku）は 1979 年 10 月に中国の民族文化宮と協約してから、中国での民具の調査収集活動を本格的に展開するようになった。その後、民族文化宮を介して、1983 年「中国地域の文化」という名称の展示場を開設するまでに、毎年一回程度の頻度で中国で民具の収集を行った。このような継続的な活動によって中国の民具コレクションは充実しつつあるものの、その収集が中国側の代行によって行われたこともあり、これらの民具に関連するさまざまな情報（現地での利用方法、製作年代など）の不足は大きな問題であった。

1990 年代後半からは、民博の中国現地への蒐集制限が緩和されることに伴い、この状況は徐々に改善され、民博の研究者が直接設定した研究課題に関連する民具が集められたほか、その利用に関連する情報もより精確な内容が把握できるようになった。また、1990 年代以降の蒐集活動においては、民具の蒐集範囲が広げられ、急速な現代化に伴う生活の変化がうかがえる各民族の生活用品が積極的に集められ、中国の少数民族の生活が伝統的な生活から観光へと転換していく変化の様相を取り上げた展示なども実現することとなった。

民博の展示は、2002 年度の耐震改修工事や 2014 年に完成した展示場のリニューアルによって、中国民具の蒐集方法や「中国地域の文化」という名称の常設展示にはいくつかの変化が生じたが、展示においてエスニック・アイデンティティーの表徴と見なされる文化的要素の強調は変わらなかった。民具は生活様式を具現化する手段と見なされる一方、実際、民博では「民族」という単位でしか「暮らし」が展示されることはなかった。したがって、民博の中国の民具の展示は、生活主体としての個々の人間の実像とその日々の生活実践を把握しようとするのではなく、その地域の一般的な生活様式から民族に特有な文化の特徴を表すことに徹した、ともいえる。

それゆえ、民博の展示場において民具で構築された「中国」像は、多民族を有する中国文化の多様な形態を表している一方、「漢族」と「少数民族」、または、伝統文化の「継承」と「変容」といった枠にとらわれない人間の多面性や物との多元的な関わり方を展示することには十分な目配りができていないのではないか、という疑問さえ抱かせている。

Materializing “China” — The Investigation, Collection and Exhibition of
Chinese Mingu at National Museum of Ethnology in Japan —

Abstract : The National Museum of Ethnology in Japan (hereafter referred to as “Minpaku”) began full-scale investigations and collection activities of Mingu in China after signing an agreement with the Cultural Palace of Nationalities in China in October 1979. Thereafter, through the

Cultural Palace of Nationalities, Minpaku collected Mingu in China about once a year until 1983 when it opened an exhibition hall under the name “Regional Cultures of China”. Although the collection of Chinese Mingu was being enhanced through these ongoing activities, the lack of information (such as the usage in local area, date of production, etc.) about these objects had become a major problem, partly because the investigations and collection activities was conducted on behalf of the Chinese side.

This situation gradually improved with the easing of restrictions on collecting in China, since the late 1990s. Therefore, the Mingu directly related to the research projects set by the researchers at the Minpaku gradually got collected, and more precise information about their usage was obtained. Also, since the 1990s, the concept “Mingu” was broadened to include a wide range of objects and daily necessities (especially objects associated with rapid modernization) from various ethnic groups in China actively collected to present the traditional lifestyle of these people, which has shifted due to tourism development.

In some ways, the method of collecting Chinese Mingu and the permanent exhibition entitled “Regional Cultures of China” did undergo changes resulting from the seismic retrofit in 2002 and the renovation of the exhibition hall completed in 2014. However, the emphasis on the cultural elements that are regarded as the hallmark of ethnic identity in the exhibitions remained the same. While Mingu were seen as a means of embodying lifestyle, in fact, at the Minpaku, “life” was only ever recognized as a cultural form of “ethnic groups” to show ethnic diversity of the region. The display of Chinese Mingu at the Minpaku did not attempt to grasp the side of individual people as a subject of a life or their practice of everyday life, but intend to reveal the cultural characteristics unique to each ethnic group through exhibiting the general lifestyle of the region.

Therefore, the image of “China” created by the Mingu in the permanent exhibition halls of the Minpaku shows the variety of Chinese culture with its multi-ethnic population. However, it also raises the question of whether the exhibition does not pay enough attention to the multifaceted nature of human beings and their multiple ways to interact with objects, which are not limited to the “Han” and “minority” groups or the “inheritance” and “transformation” of traditional culture.

はじめに

本稿で扱うのは日本国立民族学博物館（以下、民博）が所蔵する戦後の中国関係の標本資料である。民博の前身である日本民族学協会附属民族学博物館（以下、保谷民博）の標本資料は、渋沢敬三⁽¹⁾を中心に多くの人の協力によって集められたものであり、民具とも呼ばれている。他方、民博が創設される前の準備会議の部会では、標本資料について「古代のもの、特異なものでなく、現在のふつうの生活用具や生活様式が対象の主体となる」「にせものか、ほんものかが重大な問題となるようなものは原則として対象としない。美術、骨董的価値のあるものは原則として対象としない。“ハレ”と“ケ”に分ければ、“ケ”のものが主体となる。つまり、従来の博物館が並べているような宝物に主眼をおかない」「特殊なものより一般的なものを優先するのが望ましい」といった蒐集の基本方針がま

とめられている（飯島・福岡 2006：309）。

また、民博が蔵する中国関係の標本資料と聞いて、筆者が真っ先に思い浮かべたのは、1902年7月から1903年3月にかけて、中国西南部（主に貴州、雲南、四川）で少数民族調査を行った鳥居龍蔵蒐集の服飾を中心とした実物資料である。⁽²⁾ただ、このような個人による一時的な蒐集は限定されたものであり、実物の数や種類も制約を受けざるを得なかった。それに対して、1979年10月25日、中国の「民族文化宮」（北京）との協約後、民博の中国における蒐集活動は定期的に展開されるようになり、そのうち、中国西南部の標本資料も積極的に集められた。さらに、2008年には中国西南部の少数民族をテーマとする特別展示が開催されるに至った（国立民族学博物館編 2008）。その展示の趣旨は、政治や経済に焦点を当て北京、上海、広州などの大都市を中心に描かれた「現代中国」を相対化するため、西南部における少数民族の生活を取り上げることにより「中国」像を再編成するというものであった（松園 2008：5）。

民博の中国関係の「標本資料」はよりいっそう研究者の興味を引き、課題を問われることになるだろう。実際、1980年代から台頭した新博物館学（New Museology）の研究において、民族学博物館（Ethnographic Museum）は一つの焦点になり、その収蔵品や蔵品蒐集地の地元住民との関係性について活発な議論が行われており（Bouquet 2012：6）、民博もそれらの課題に積極的に取り組んでいた。⁽³⁾館内の一部の標本資料の形成はすでに検討されていた（藤井 2010、齋藤 2015、野林 2018）。また、近年において、民博に収蔵されている中国関係の標本資料の種類や合計点数などの基本的な情報も中国側に伝達された（斯 2017、喬旦 2020）。しかしながら、これまでの研究は、中国関係の標本資料の内訳や蒐集の経緯また展示の詳細には言及がなく、民博の標本資料に主眼を置いた中日間の「物」の交流史は再考する余地がある。⁽⁴⁾

上記を踏まえ、本稿では標本資料を民具と呼ぶこと⁽⁵⁾にして民博の中国における民具の調査蒐集活動（1979年初収集から2014年リニューアルまでの間）と中国民具のコレクション（一部）の形成過程を文献資料及び口述資料を通じて検討する。また、1983年に開設された「中国地域の文化」という名称の展示場の40年間の変化も取り上げ、そこに映された「中国」像を考察する。

さて、民博が主導した国際交流の中で、最も組織的に行われたとされる（国立民族学博物館編 1995：51）中国に関するプロジェクトは、一体どのように展開され、民具の蒐集活動はどのように行われていたのか、次節から見ていくことにしたい。尚、本稿では蒐集活動の変化を示すため、「蒐集」と「収集」を区別しながら用いている⁽⁶⁾（ただし引用文献は除外する）。

I 戦後中国における初収集の民具

1979年10月20日、佐々木高明（1929-2013）、君島久子（1925-2023）、藤井知昭（1932-2023）、大丸弘（1933-2017）一行は民博から派遣され中国へ渡った。5日後、民博側と中華人民共和国国家民族事務委員会が主宰する民族文化宮との間に、標本資料の蒐集に関する協定書が正式に締結された。それをもって、中国民具の蒐集が正式に始まった。

とはいえ、それが実現に至るまでの前史がある。

まず、1978年11月1日から10日にかけて、民博初代館長・梅棹忠夫（1920-2010）の代理として

の佐々木高明は、茅誠司（1898-1988）を団長とする学術訪中団に加わって訪中した。11月6日、方毅副首相と訪中団が直接会談する場で、彼は中国関係の展示資料の蒐集協力の要望を伝えた。そして、11月9日、彼は民族文化宮で国家民族事務委員会の副主任であった江平（1920-2022）、また民族文化宮主任の代理であった楊廷智と会い、民族衣装と伝統的な楽器を中心に中国各地の少数民族の資料蒐集に関して協力を依頼した（国立民族学博物館編 1979a：111、佐々木 1980a：2-11）。

翌年4月6日、中国社会科学院に属する傅懋勣（1911-1988）と呉澤霖（1898-1990）は民博を訪問し、その際、中国側の返答として民族研究所（現・中国社会科学院民族学與人類学研究所）、中央民族学院（現・中央民族大学）、民族文化宮の三者が標本資料の蒐集に協力することと、中国側の蒐集活動がすでに始まっていることを伝えた（国立民族学博物館編 1979b：86）。

その後、呉澤霖を窓口にして、再度具体的交渉が始まり、楊廷智は中国側の受け入れの責任者として交渉を進めていた。その段階における交渉結果として、10月20日、前述した民博の4人の研究者が成田空港から北京に向かった。そして、10月25日、中国側の代表である林耀華（1910-2000）と日本側の代表である佐々木高明は中日友好関係を確認した上で、文化交流ならびに学術資料を提供する協定書が締結されたのである（国立民族学博物館編 1979b：86、佐々木 1980a：2-11）。

当時、この4人のうち、佐々木高明（当時・アジア南部第二研究部）は1974年11月から12月にかけてタイ、ネパールの両地域で、農具、生活用具、民族衣装を蒐集した経験があり、藤井知昭（同）も1975年1月から2月にかけてイラン、アフガニスタン両地域で楽器、民族衣装、絨毯などを蒐集したことがあった（国立民族学博物館編 1975a）。君島久子（当時・アジア北部第一研究部）は1977年8月15日から28日にかけて中国の上海、長沙、桂林、北京に訪問したことがあった（国立民族学博物館編 1975b；1977）。大丸弘はヨーロッパや日本の服装史の研究者であり、その年（1979年）に助教授として第五研究部（通文化）に着任したばかりであった（国立民族学博物館編 1979b）。

その時の標本資料の蒐集は中国側が代行し、4人の主な仕事は、民族文化宮の一室に置かれた民族衣装や楽器を点検した上で受け取り、それぞれの基本データを作成し、日本へ無事に送り出すことであった。当時北京で収集されたのは、中国側からの贈呈品（表1）と中国側が民博の要望に応じて事前に購入した民具（表2）である。

これらの民具は北京友誼商店を経由し日本へ積出された際、研究者たち4人は林耀華、楊廷智ら4人（事務官1人、通訳者1人）とともに昆明へ出発した。その後、長沙・桂林・上海などにも寄りながら、民具の蒐集を行い、その途中の見聞について、佐々木高明はこのように述べている。

中国の農村地帯においても、生産や生活に用いられる道具が急速に変化し、古い伝統的な民具類が消滅していることは間違いないようである。例えば、龍骨車のようなものも、いまではほとんどなくなってしまったようで……（中略）……雲南でも、湖南でも、車窓からみる限り、中国の農村地帯には、まだまだ伝統的な生活様式がよく残っているようで、その保存のためにも、資料の収集作業を急ぐことが必要のように思えるのである……（中略）……このような保存状態のよい民家を内部にある民具類とともに、そのままに移転さすことができれば、中国文化の紹介、或は中国と日本の伝統的農村文化との比較などの面で大変重要な意味を持つようになるのではなかろうか（佐々木 1980a：7）。

佐々木高明の西南中国へのまなざしは日本文化源流への関心に結び付いている。1980年代に入り、彼は「照葉樹林文化論」や「ナラ林文化論」の検証を始め、民博の共同研究を中心⁽⁷⁾に日本民族文化の源流を探究する方向に進んだ（佐々木 2003：307）。彼が民具に着目したのも、その関心とつながっている（佐々木 1982；1993；1997；2009；2013）。1980年1月30日付の『毎日新聞』に、「興味深い伝統衣装、楽器：オコワなど日本とそっくり」という見出しを付けた記事が載せられ、その中で佐々木は次のようなことを述べている。

そう言えば、今回、私たちは北京での仕事を終えたあと、昆明・長沙・桂林などを旅したが、各地の少数民族の生活文化の中に日本のそれと類似するものが少なくないことに驚いた。なかでも興味深かったのは、長沙で湖南省民族事務委員会副主任の栗海亮氏から聞いたモチについての話だった。同氏は侗（トン）族の出身だが、侗族をはじめ苗族・瑶（ヤオ）族などの湖南山地に住む少数民族の人たちは、いずれもネバネバしたモチゴメが大好きで、それをいまでも多く栽培している。食べ方としては日本の甑（コシキ）とそっくりの道具でモチゴメをむしてオコワにして食べるものをはじめ、モチゴメをむして臼と杵（きね）でペッタラコとついて円いモチをつくって食べるのだという。しかもそのとき杵はいまではタテギネを用いているのに対し、三十年ほど前までは日本のモチツキギネとそっくりのヨコギネを使っていたというのである。私は驚いてしまった……（中略）……栗海亮氏の話聞きながら、何もかも日本のモチと同じではないかと思う。われわれが古くから受けついできた日本のモチ文化の故郷を、私はここに見いだしたような気がした（佐々木 1980b）。

とはいえ、実際、今回北京以外の地域で収集された民具は北京での贈呈品あるいは代行購入された類とはそこまで変わらなかった（表3）。『国立民族学博物館昭和四九年度概算要求書付属品参考書』では、標本資料の蒐集内容を四つ（「一、農業、牧畜、狩猟、漁撈などの生産に関する用具類。二、衣食住をはじめ、楽器、遊びにいたるまでの諸民族の生活に関する用具類。三、紡織製品をはじめ、木製品、金属製品、陶製品などの製作技術に関する用具類。四、各種の宗教儀礼をはじめ、冠婚葬祭に関連するさまざまな用具類」）（飯島・福岡 2006：308）に分けて説明しているが、前掲の三つの表を見ると、中国での初収集活動により集められた民具は基本的に2点目に限られていることがわかる。しかし、その状況は1981年から徐々に変わっていた。

II 資料の充実と展示場の開設——1980年代以降の動き

1980年、藤井知昭により集められたのは衣服（民族衣装）が中心であったが（表4）、1981年には、大丸弘により集められた民具の種類が増え、収集地域及び少数民族も多様になった（表5）。このように、標本資料の収集は確実に進展を得ていたが、注意しなければならないのは、それは、研究者たち自身が現地で行った蒐集活動による結果ではなかったことである。

1979年、民博と民族文化宮が提携して以来、毎年の蒐集活動を行う前に、両方が事前に打ち合わせていた（国立民族学博物館編 1982：79）。民博側が希望する資料の内容を盛り込んだ会談の記録を

前年度に協議書として作成し、これに従って民族文化宮側が蒐集を行い、その翌年、民博側はそれらの資料を受領する（国立民族学博物館編 1984a：304-305）。このようなかたちで中国にある民具が民博に集められてきた。

ところが、民博に収蔵されている中国の民具は、必ずしもその単一のルートを通じて蒐集されたわけではない。例を挙げると、1981年9月、長野泰彦はインド、ネパール王国、香港でチベット（西藏）自治区チベット族の民具を蒐集したことがある（表6）。1982年10月、栗田靖之は南アジア地域の展示用資料の蒐集を行う際にも、香港でチベット族の民具を蒐集した（表7）。また、「京劇衣裳」（みんぱく標本番号 H0098479）は中国山東省で用いられたが、実際、東京都内で蒐集されたのである。

こうした民具蒐集にさまざまな工夫をした結果は、1983年11月、「中国大陆を中心とする東アジア諸文化の展示場」（梅棹 1987a：291）の公開に伴い（表8）、「中国地域の文化」展示は開設された。1986年の『国立民族学博物館展示案内』では、佐々木高明が「中国地域の文化」の展示を次のように解説している。

中国地域展示の第一のねらいは、この日本と関係の深い江南地方の生活文化の特色を示すことである。典型的な稲作農家と、その農家が所有していた稲作道具一式や、揚子江中流域の代表的な漁船などを展示した。だが、中国文化の大きな特色のひとつは、早くから城壁にかこまれた都市を発達させたことである。都市の生活文化を象徴するものとして、北京市にある伝統的な都市型住居といえる四合院の模型を製作・展示した……（中略）……そのなかに主として漢族の人たちが伝承してきた、都市を中心とする祭りや芸能の例を数多く示した。他方、中国地域の祭りや芸能のなかには、ミャオ族の竜頭で象徴される「竜舟競渡」のように、中国南部の諸地域をはじめ、各地の少数民族のあいだにひろく伝承された祭りもある。この西南中国の少数民族のもつ文化のなかには、日本の基層文化と特色を共通にするようなものが少なくない。中国地域展示の第四のねらいは、これらの西南中国の少数民族の文化の特色を示すことである。民族衣装をはじめ、生活文化にかかわる多くの資料が展示されている……（中略）……第五の展示テーマとして、チベット高原や北部・西北部の草原地帯の牧畜を基盤にした生活文化の特色をとりあげている。だが、それは中央アジア地域の展示と連続する性質をもつ。中国地域展示の最後のコーナーは、そのような意味で、つぎの地域展示へとつながるわけである（国立民族学博物館編 1986：144-145）。

すなわち、民具を通して、多民族が居住しており、伝統を継続している、しかも他の地域との文化の連続性（とりわけ日本文化との関連性）を持つ「中国」の姿を表したい。このねらいに合わせた展示は、「祭りと芸能」「都市の生活」「江南の生活」「山地の生活」「高原の生活」「草原の生活」六つのセクションで構成され、展示品の一部は表9に示した通りである。

Ⅲ 特別展示の開始と蒐集の変化

1989年6月、民博の特別展示館が竣工されたあと、特別展示と企画展示が開始された⁽⁸⁾。それ以降、本館の展示は常設展示として扱われるようになった。前節で述べた展示場の民具も、常設展示の一部である。

実際、特別展示と企画展示はあるテーマに絞って展示を行うことであり、常設展示と異なる蒐集方針が要求された。民博内部の議論の結果としては、当初蒐集案を募集するにあたり「収集をぜひとも必要とする地域」と「その他の地域」の区分が1990年に廃止され、翌年度分の提案募集から適用された（飯島・福岡 2006：309）。

しかし一方で、その頃、中国の国家民族事務委員会の許可がなければ地方での蒐集活動を行うことは相変わらず困難であった。しかも、1983年まで年一回行われた収集活動は、1983年以降は、二年に一回の頻度に変更された（表10）。

1989年、利光有紀（小長谷有紀、当時・第一研究部助手）が民族文化宮に収集の依頼をしていた民具を受け取るために北京に赴いた（国立民族学博物館 1990）。その際に、同年10月から広西民族学院（現・広西民族大学）に滞在していた塚田誠之（当時・第三研究部助手）は南寧から手伝いに行った。また、塚田は次回（1991年11月）の民具を引き取る担当になった。その頃の収集実態に関しては、彼は次のように回想している。

1990年代前半に北京の民族文化宮で収集をする際に、次回（2年後）に収集を希望する資料を依頼しました。希望をする資料は民博の中国展示プロジェクトチームで検討をしたものです。したがって2年ごとに要望を出して先方との会談で合意を得た後、収集してもらった資料を受け取りに行くという方式でした。北京での作業は次のものでした。民族文化宮の中の臨時に閉鎖した展示場と思しき空間の床に資料が並べられており、それらを1点ごとに民博のA5サイズの収集カードに手書きで登録をして、日本での通関のため番号札を紐でつけて、カメラでその番号札のついた資料を撮影しました。収集カードに記入する内容は、資料名（現地名、日本語訳）、収集年月日、収集者、収集地、使用地、使用民族、使用年代、製作年代、製作者、製作法・材料、用途・使用法、価格、入手状況等50もの項目でした。カメラですが、当時はまだデジタルカメラがなく、米国製の重いインスタントカメラを使用しており、そのために大量の専用フィルムをダンボール箱に入れて持参しました。普通のカメラで撮った場合、もしピントが合わずに番号が確認できなければ通関できないという事情がありました。こうした登録作業をごく短時間の間（大体1、2日）に数百点の資料について先方の担当者に情報を聞きながらするのは重労働でした。この他に収集資料に対する支払い等のため、銀行へ行きT/Cを中国人民元（当時は外貨兌換券）に両替します。さらに運送会社（コンテナに積み込まれた資料を北京から天津港まで陸送し、天津から大阪までは海運で運んだ）、保険会社に行きます。こうした輸出に関する一連の作業を収集委員が責任をもってすることになっていました（資料の梱包もおそらく運送会社に委託していたと思います）。あらゆる経費に関する出納簿をも収集委員が作成しました……（中略）……帰国後、まず民博内で報告書、民族文化宮の作成した資料リスト（これがインボイス、貨物の送り

状となる）や番号札のついた資料の写真、収集資料の領収証、出納簿、船積み証、保険証書やその他の領収証等の書類を提出します。後日、大阪港の税関から連絡が来て、職員が資料のリストと写真等を持参して通関をしに行き、通関手続き完了後に収集品がトラックで民博に到着します。こうしてはじめて収集委員の任務が完了します（塚田 2022）。

民族文化宮を通じた蒐集活動は思ったように進まないことが多かったと思われるが、蒐集目標はある程度達成した。この二回で蒐集された広西壮（チワン）族自治区の「靖西県」と「隆林各族自治县」のチワン族の生活用具は、1993 年 2 月から開催された「新着資料展示」に展示されるようになった（塚田 1993）。

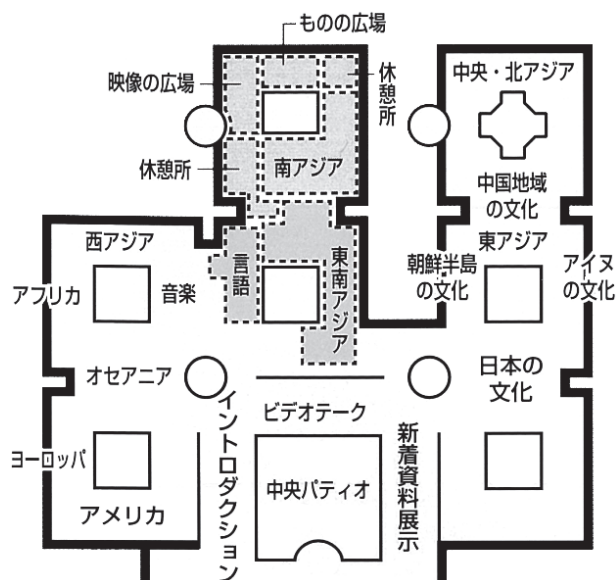


図1 「常設展示場」
（1996 年『国立民族学博物館 第7 展示場』パンフレット）

「新着資料展示」とは、民博の研究者が標本資料調査蒐集活動を行った後、すみやかにその成果を一般に公開するため実施された展示で、1979 年から年二回、約 6 カ月の展示期間で、本館の 2 階に設けられた「新着資料コーナー」において行われた。中国関係の資料の紹介は第 4 回（1981 年 3 月 26 日から 7 月 21 日まで）の「中国の少数民族の衣裳」（佐々木高明担当）、第 18 回（1987 年 11 月 26 日から翌年 5 月 23 日まで）の「風の美——中国——」（周達生担当）、第 28 回（1993 年 2 月 25 日から 8 月 31 日まで）の「中国・壮（チワン）族の生活文化」（塚田誠之担当）である。

1989 年と 1991 年の二回で集められた資料を見ると（表 11、表 12）、中国に関する民具は、多地域にわたり収集された一方、塚田らのフィールドに関わる物も集められたことがうかがえる。とはいっても、研究者たちは現地で自由に蒐集することができない限り、やはり研究目標を満たす蒐集活動は期待できない。

IV 現地への蒐集活動の展開——1990 年代

民族文化宮を通じて行われたこのような収集活動は 1990 年代後半から変化が生じた。塚田誠之の

1995 年の蒐集経験によれば、その頃すでに変化の一端がうかがえる。

1990 年代前半は中国中央の政府機関である民族文化宮を経ないと収集や輸送ができない状況でした。しかし、民博の中国展示プロジェクトチームの判断と助言に従い、1995 年の収集の際には、北京での収集作業を終えた後に雲南省南部へ行き、雲南省民族博物館（当時はまだ設立準備委員会）の職員の協力を得てヤオ族やハニ族、イ族などの民族衣装を収集し、それらを昆明から輸送しました。この時の収集は主に北京で行い、雲南では補充的なものでした。博物館や研究所などの政府機関を通してではありますが、この頃から、必ずしも中央に頼らなくとも地方の政府機関を通じた収集ができる時代へと行って行きました（塚田 2022）。

ちなみに、雲南で蒐集を行う際に、民具の使用者情報に関しては、民族別にとどまらず、使用者個人の姓名、性別、年齢など、より具体的に確認⁽⁹⁾された。

ようやく 1997 年に入り、従来民族文化宮を通じて実施してきた「収集」は、研究者たちが直接現地⁽¹⁰⁾に行き民具を「蒐集」する方法に変更された。この年の 9 月は、民博から 4 人の研究者が中国に向かった。

まず、前年民博第三研究部の助手として着任したばかりの野林厚志は民族文化宮に向け、9 月 9 日に出発した。そして、9 月 16 日に塚田誠之、小長谷有紀、横山廣子も北京へ向かった。民族文化宮が蒐集した民具の受領が終了した後、塚田誠之と小長谷有紀は先に（9 月 19 日）日本に戻ったが、横山廣子と野林厚志は雲南へ向かい、現地での蒐集活動を行った（国立民族学博物館編 1997b）。

初めての現地蒐集は横山廣子が 1984 年からフィールドワークを始めた（横山・梅棹 1987：40）雲南地域で行われ、雲南民族博物館側から派遣された協力者と同行し、トラックに乗り現地を回りながらというかたちで活動を展開⁽¹¹⁾した。

蒐集活動は自由になったかのように見えたが、それでも制限があり、しかもそれまで経験したことのない場面にも直面しなければならなかった。例えば、資料の通関手続きに関して、それまで民族文化宮を通じて行っていた場合と比べ、より複雑になった。1990 年代から中国へ民具蒐集に赴いた回数が一番多かった塚田誠之（表 13）は次のようなことを述べている。

かりに農村でモノを買ったとしても、それらを通関させるのはまたたいへんだ。しかるべき博物館や研究所がその資料を「文化用品であって商品でない」旨を証明してくれる書類や、中国が輸出を禁止しているものではないという文物局による鑑定の書類が必要だ。少数民族女性の銀製装飾品などの貴金属製品についても国外への持ち出しの可能な重量が決められており、その証明もいる。わたしは中国で収集するときには、多くは省や自治区の博物館や研究所などを通して購入している。その際に、前もって購入候補をリストアップし相手側に代行して集めてもらう方式と、相手側に同行してもらって直接、現地で購入する方式の、二つの方式を併用している。農具・生活用具など使い方がわかりやすいものは前者の方式で、民族衣装など着付けの過程や使い方をビデオに収録する必要があるものは後者の方式を用いている（塚田 2005：18）。

とはいえ、1997 年度から実施された現地蒐集は、研究者たちの研究テーマに沿った民具が積極的に集められたことがうかがえる。1997 年度に行われた蒐集は、大理ペー（白）族をめぐって展開され（表 14）、それをきっかけに、2002 年 2 月 23 日から 8 月 20 日にかけて、横山廣子が担当した「中国・雲南の絞り藍染め——大理ペー族の村から——」のコレクション展示（「新着資料展示」から改称）が開催された。また、野林厚志にとっては、当時特に強く希望していたわけではない傈僳族の狩猟用「弩」を蒐集することができ、結果として自身の研究関心も広がり、それ以降の研究にもつながっていた。

V 展示の新設・新構築——2000 年代以降の新たな動き

阪神・淡路大震災の影響により、民博では 2002 年 11 月から 2003 年 3 月まで耐震改修工事が行われた。その工事に伴い、「中国地域の文化」の常設展示はいくつかの変化が見える。

技術上の問題で、「江南の生活」のコーナーの農家の「門楼」を解体撤去したほか、漁船と漁具、農具、農家の台所用品など 1980 年代初期に収集された民具は年月が経っており、またそれらの資料に関する情報も少なく、現地の人々の生活・生業の実態を理解するには限界があるため、工事終了後、「江南の生活」のコーナーが撤去された（塚田 2006：212）。

その代わりに、2003 年 4 月 1 日は「中国雲南の絞り藍染め——大理ペー族の村から」（横山廣子担当）と「台湾原住民族の文化——ナチュラリスト鹿野忠雄の収集資料」（野林厚志担当）という二つの地域テーマ展示が設置された。

前者は雲南省の大理盆地にある周城というペー族の村の絞り藍染め品を展示し、染料づくり、糸絞り、染色などの技術面を含めて、そこから見られる変化を通じて、中国現代社会の一端を紹介した（横山 2006：214）。後者は「地理的な概念としての「中国地域」に從來、台湾の文化が欠如していたのを補」（塚田 2006：212）うものであり、さらに、これまで、さまざまな理由で、展示されることのなかった台湾関連の資料が常設展示に展示されることになった。しかも、従来の民博の地域や民族集団という文脈に沿った展示とは異なり、今回は研究者の活動という視点から、台湾原住民族の物質文化について解説を加えたという（野林 2006：214⁽¹²⁾）。

(1) 「花輿」を入れ替える

2008 年度に入り、民博におけるすべての常設展示の新構築、すなわち全面改修が始まった。

「中国地域の文化」の新構築は直ちに開始されなかったが、そのための準備はすでに着手されていた。2008 年に、初めて蒐集に加わった中国人研究者である韓敏は、民博における中国漢族の民具を充実させるため中国に出発した。

私が民博に赴任したのは 2000 年 4 月です。当時私が入ったときは中国における標本資料収集は、すでに民族文化宮を通じた間接的な収集が中止しました。私は中国における収集を行う時に、民族文化宮との接触は一切なかった。つまり民博側の通常の手続きに従って、出発する前の年度に企画書を出して、どこに行く、何を集めてくるかを提案するのです。初めての収集を行っ

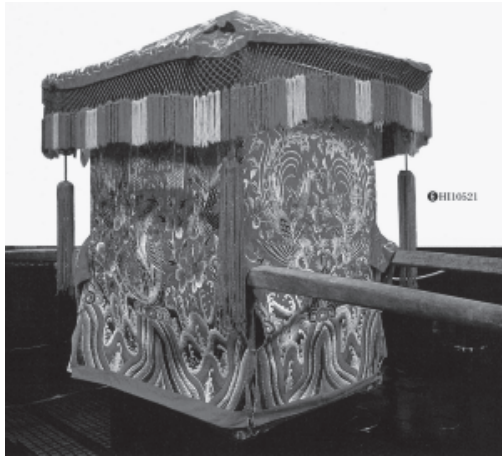


図2 「花輿」(1986年『国立民族学博物館展示案内』)



図3 「花輿」(2022年4月23日、筆者撮影)

たのは、2008年度のことでした。収集に関する企画書は前年度、2007年に提出しました。そこに、なぜそれを集めたいのか、どんなところで集めたいのか、どれくらいの物を収集できる見込みか、大体いくらかかるかなどを記入しました。その企画書は、文化資源運営会議の審議を経て、採択されたので、それで中国現地への収集を実施することが可能となりました⁽¹³⁾。

ここで注目したいのは、今回彼女の蒐集に当たって、2014年にリニューアルした後「継承される伝統中国」セクションに置かれている「花嫁の輿」についてである。

「花輿（ファジャオ）」、すなわち「花嫁の輿」は、「中国地域の文化」の展示場が1983年に開設されたときはすでに一式が展示されていた。それは当時の松原正毅先生が北京の民族文化宮を通して間接的に集めた物である。それについて、2013年一度松原先生に電話で伺ったこともあります。この「花嫁の輿」は結婚式用だを書いてありましたが、これは展示するために作った物なのか、いつ頃作った物でしょうか。そして、この花嫁の輿は花嫁を迎えるのに使ったことがあるのかなど松原先生にお伺いしました。松原先生はそれはわからなかったと、ただ、花嫁を迎えるために使う人がいることは聞いていたと返答してくれました。この標本資料の情報は非常に限られたものです。たぶん当時はそういうことが多かったかもしれません。実際に現地で収集を行った中国側の人と、資料を受け取る民博側の人の間で対話はうまくいったかどうか、また、その間の仲介をした民族文化宮は、どこまで説明したのかはよくわかりませんでした。その後、中国地域の常設展示新構築（2014年度）のために、中国チームの教員もそれについての議論を行いました。私は、ここは人類学博物館だから、花嫁を迎えるときに実際に使った花輿を収集すべき。ただ物を集めて展示するだけでなく、展示されている物はどうのように使われていたのか、またどのように作られたかを、来館者にきちんと説明できるようにするべきと話しました。そして、私の提案が中国展示チームの中で承認され、2008年度に自分のフィールドである安徽省の宿州市で収集され、しかも実際の結婚式に使われた「花輿」を、新構築後の中国地域の常設展示場に展示することになりました⁽¹⁴⁾。

1980年代に蒐集された花輿（図2）は、木製で、刺繍や窓ガラスなどが付けられ、8人で担がれると展示案内に書かれている。2008年に蒐集された花輿（図3）は、籐と竹を材料とし、担ぎ手は4人、民博に運ばれる前に実際に使用された。また、製作者である職人の系譜、及び使用者、使用範囲、中国の現代の婚礼事情などの情報もある程度把握された（国立民族学博物館編2014b）。この花輿の蒐集は、安徽省にある宿州学院の教職員からの協力を得たうえで実現したとはいえ、中国の出身である韓敏が実施した蒐集活動の全体から見ると、博物館や研究所などの協力を得られないまま個人で行う例もあり（表15）、日本人研究者との違いはある程度うかがえる。

（2）「住居」から「暮らし」へ

前述した特別展示「深奥的中国：少数民族の暮らしと工芸」は2008年に開催されたものである。これまで、中国の住居に関しては、前述した耐震改修工事により撤去された「江南の生活」のコーナーを除けば、常設展示に設置された「北京四合院」の模型が代表になっている。しかしながら、筆者が展示場で確認した限りでは、建築物の外観と周囲の風景だけを再現したものと思われる。それと比べると2008年の特別展示では、「チワン族の高床式住居」の再現に伴い、その住居で営まれていたであろう「暮らし」も展示された。

この特別展示の主な担当者であった塚田誠之は、前述した広西民族学院に留学した1990年代初頭の時期からチワン族の調査を行っていた。一連の調査や研究を通じて、彼はチワン族の暮らしを再現しようと考えた。

壮族は歴史上漢族の影響を強く受けて、その文化は壮族独自の要素と漢族的な要素とが並存する複合的なものでした。また現代化によって文化の変化も見られました。文献や聞き取り調査による研究を行い論文においてそうしたことを指摘しました。この壮族文化の複合的な特徴は、標本資料からも示すことが可能だと思いました。こうして資料を収集して、壮族の農民がどのような暮らしをしているのか、上記の複合的な特徴を持つ生活文化の実態を視覚的に示すような展示をしたいと思うようになりました（塚田2022）。

彼は1998年に現地で下見を行った後、展示のために必要な資料リストを作成した。

資料としては、家の祭壇の神位（赤い紙に祖先や神祇を祭る文言を墨書したもの）・祖先の位牌やろうそく、ろうそく立て、線香、酒杯、香炉、供え物案卓（祭祀のための台）等の祭祀とそれに関連する資料、生活用品としては、ガスこんろ・中華ナベや各種のナベ・フライ返し・調味料入れ・まな板や包丁などの調理用具・用品、茶碗や皿・箸などの食器類、ザル・カゴ・洗面器・水瓶などの各種容器類・魔法瓶、家畜用の餌を煮る大ナベなど。ほかにカラーテレビ、カセットデッキやスピーカーなどの電気製品、さらに各種農具や自転車など……（中略）……年中行事の場合、新年の飾りもの、春の行事に使用する繡球、「搶花炮」用具、中秋節の各種の飾り灯籠、他に獅子舞用品、龍舞用品、操り人形劇用品、特産の縫い取り文様入りの織物「壮錦」を製作するための機織り機「猪籠機」、冥屋等々の資料をリストアップしました。また、壮族の場合、民



図4 「北京四合院」模型（2022年4月23日、筆者撮影）



図5 「チワン族の高床式住居」の展示外観（2022年7月24日、筆者撮影）

族衣装は地味なものが多く、中年以上の人が着用するのですが、そうした衣服もリストアップしました。これらのほか、現地ではトゥモロコシを家畜の飼料用に植えており、秋に大量のトゥモロコシを収穫して家の梁に結わえて干していたのですが、再現展示をした場合に備えてそのトゥモロコシのレプリカの作成も依頼しました（塚田⁽¹⁵⁾2022）。

この「展示場に高床式住居を再現し、他に年中行事を紹介することで、上記の壮族の文化的特徴を理解してもらえよう」にする蒐集計画が展示委員会で承認された。広西壮族自治区博物館にも相談をした後、翌年（1999年）の2月から、塚田誠之は現地で蒐集を実施した。その時、壮族の人々の年中行事の過ごし方を取材し映像記録の撮影も行った。しかし、高床式住居を特別展示場に建てて展示することの技術上の懸念で特別展示の開催は見送られ、特別展示を進めることができたのは2006年秋からであった。そして、2007年5月に塚田誠之は中国へ渡航し、現地で再び蒐集を行った。

高床式住居の再現に必要なものとして木製門扉や窓枠を注文製作をしてもらいました。また新品の屋根瓦約500枚を購入しました。また、モデルとした家で実際に使われていた洋服ダンス、学

習机、食卓などの家具や大きな木製の米櫃を譲ってもらいました……（中略）……くわえて数日に一度の割合で最寄りの街で開設される定期市に、地元農民が生活必需品を買い出しに行き調達していたことから、こまごまとした雑貨（懐中電灯、電池、鏡、錠前、爪切り、くし、使い捨てライター、靴ブラシなどいわゆる百貨ショップで売っているような日常雑貨）を売る露店を再現展示するための商品を購入しました。また、高床式住居におけるメタンガスを利用した循環型の生活（人間や家畜の排泄物を（化学肥料とともに）野菜作りの肥料にしたり、排泄物（肥溜め）からメタンガスをとってガス灯や調理用コンロに利用）を示すための器具（ガスを引くためのチューブや有毒物質を濾過して除去するための脱硫器、メタンガス測定器、メタンガス用のコンロ等）も購入しました（塚田 2022）。

前述したように、現地で蒐集を行う場合、実際に使用したことがある民具は優先的に選択されるべきという考えもあるとはいえ、ここで注目したいのは、日常用品を蒐集する際には、現地住民の生活に支障が出ないように配慮もしなければならないことである。今回では実際に生活で使用している物、例えば、神位や位牌、供物はレプリカを製作してもらい、ベッドやふとん、枕、衣服、教科書、薬品の箱、門扉に貼る対聯や門神画、「福」など縁起の良い文字の飾り物、子供が学校でもらった賞状、人気俳優のポスター、金属製蓋付き穀物入れ、足踏み式の脱穀機などは新品で購入したという（塚田 2022）。

2008 年に開催した特別展示では、高床式住居の 2 階部分だけを再現し展示した。展示終了後、家自体は解体されたが、資料の多くは 2014 年にリニューアルされた常設展示の「チワン族の高床式住居」セクション（表 16）に移された。

（3）変動する社会・変貌する物

民博は 1991 年度から、10 年計画で特別研究「20 世紀における諸民族文化の伝統と変容」を推進した。研究の焦点の転換は、民具に対する見方や蒐集の仕方にも影響を与えた。1999 年 11 月に開催された国際シンポジウム「日用品の 20 世紀」では、生活用品への多角的な視点が提起され（近藤編 2003）、また、2002 年 3 月 21 日から 7 月 16 日にかけて開催された「2002 年ソウルスタイル」という特別展示では、ソウルの李さん一家の家具調度、衣類、寝具、冷蔵庫の中味や給与明細や成績表まで 3 千数百点の物を展示し、一週間、一日のスケジュールに合わせて「暮らし」を再現した（国立民族学博物館編 2002）。塚田誠之も 1990 年代初頭、変化をつづけるチワン族の「生活様式」に注目した（塚田 1993b）。また、1997 年に中国で行われた蒐集活動においてクリスマス用のグリーティングカードも蒐集され、さらに、2008 年の特別展示では、横山廣子が担当した展示コーナーは「少数民族観光」の現状を取り込んで、商品としての工芸品を展示した。

とはいえ、文化の変容とは、ただ「過去から現在へ」の一方向的移行だけを意味するのではなく、過去から現在まで続く、過去と現在を結び付けることも考えられる。2014 年リニューアルした後、地域テーマ展示コーナーから転換された「台湾原住民族」セクションでは、若い世代の原住民が民博に来て旧蔵品を調査した上で作った衣服と、研究者が現地に行って、写真を見せながら説明を行った上で原住民が作った衣服が同時に展示されている。また、「華僑・華人」セクションには、すでに帰

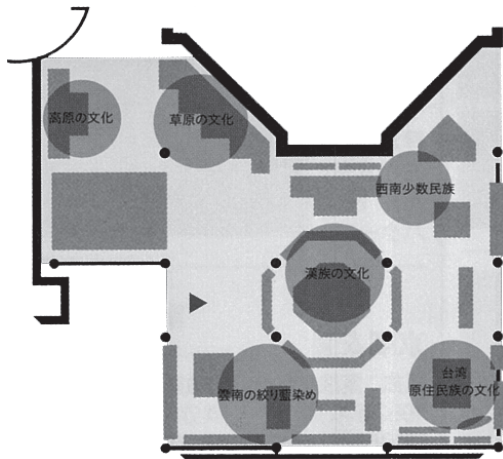


図6 「中国地域の文化」の常設展示場
(2012年『国立民族学博物館展示ガイド』)

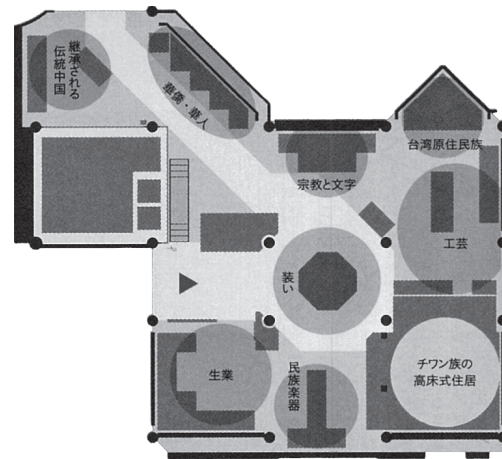


図7 「中国地域の文化」の常設展示場
(2014年『国立民族学博物館展示ガイド』)

国・帰郷した人が持参した物もあれば、まだ海外に滞在している人の使う物もある。

VI 民具から見る「中国」

民博の展示場では、写真撮影は自由であり、展示品と人の距離をできるだけ置かないようにして、実物を見るだけでなく、触ったり、たたいたりすることもできる。このような独特な展示方法は、民博の人気を博するところでもある。ただ、ここで注目したいのは、そういったことではない。

民博の展示方針について、1975年12月、民博の展示企画委員会がまとめた「国立民族学博物館における展示の基本構想」（国立民族学博物館編 1984b：234）の中では、次のようなことが記されている。

さきに、本館の展示は、世界を見る窓であると述べたが、ここが世界の現状だけを見る窓であってはならないのである。現状だけを見るのでは博覧会になるので、民族学博物館という以上は、それらの民族の現在の生活と文化をささえる基層伝統文化、あるいは歴史的過程なども無視することなく展示表現したい。

基層文化が、現在の生活や文化にどのように影響し、生きているかを表現することはむづかしいが、これを換言すれば、現在の生活や文化をどのようにとり扱うかによって基層文化を呼び起こすことができる。

また、特異な文化、めずらしい生活文化ばかりを強調する展示では、さきに述べた博覧会展示に終わるおそれがある。このようなことから、それぞれの地域の「常識的な文化」を展示することが望ましいのである。常識的な文化とは、その地域に入れば、当然だれもがすぐに気がつく文化のことをいうのであり、これをまず第一に取り上げるべきであろう。

それに応じて、1983年に開設された「中国地域の文化」の六つのセクションは、それぞれの地域に暮らしている代表的な民族を取り上げ、地理上から中国大陆の輪郭を描き出したほか、それらの民族の生活を反映している「伝統的な」民具を見せながら、中国の独特の文化的特徴を提示した。

しかし、このような一見したところ「物だらけ」としか見えない展示手法は、批判も浴びた。1994年にまとめられた『国立民族学博物館の現状と課題』（国立民族学博物館編 1995：112）の中では、次のようなことが述べられている。

しかし、「モノ」の展示で異文化を紹介することに限界のあることも事実である。「モノ」の展示だけでは、その物を使う諸民族の顔が見えてこないのである。そこで新しい民族学博物館においては、「モノ」の展示に加えて情報の展示という新しい概念を導入をしなければならない。

また、今日までの博物館は、「モノ」中心主義であったために概念は展示できないという考え方が有力であった。しかし、民博を訪れる観客は、「民族とは何か」「文化とは何か」を知りたいという学習意欲に燃えて訪れてくるものである。そのような欲求に対して、我々は応えなければならない。そのためには、現在急速に発展をとげているマルチメディアの情報処理技術に着目し、これらの技術のもとに、今まで不可能と考えられてきた「概念の展示」というものの可能性を追求しなければならない。

博物館とは意味の収蔵庫であると、かつて、民博の初代館長であった梅棹忠夫は言っていた。そして、意味とは情報である。博物館に収蔵されている品物は、情報として収蔵されているため、博物館は情報の収蔵庫であり、また、展示を通じて、その収蔵された情報を市民に伝達することができるゆえ、博物館はひとつの情報伝達装置でもあると、彼はさらにこう解釈していた（梅棹 1987b：40-41）。

しかし、情報というものはつねに変動し、とりわけ 21 世紀に入ってから、「常識的な文化」への認識は激しく揺り動かされ、「基層伝統文化」は再構成され、更新されつつあるものという見解も広がっている。そのような状況において、民博は研究者たちの研究と連動する特別展示の開設や、外国語での展示解説に手を加え、展示されている側の現地の人々を招いてシンポジウムを行うことなどを積極的に取り込んでいた（栗田 2000）。そして、2001 年 3 月に発表した『国立民族学博物館における第二期展示基本構想』により、「世界についての深く、しかも最新の情報を提供することを使命とする」民博の展示は、現代性やテーマ性を持つ短期交替の企画展示を実施する「テーマ展示コーナー」を打ち出した（吉田 2006：189）。

2000 年前後から準備に着手した「深奥的中国：少数民族の暮らしと工芸」の特別展示も「生活の現代化を示す」（塚田 2022）民具が集められ、さらに、2003 年 4 月から中国展示場では、「現在の人びとの生活に直結した社会文化変容、および民族の多様性に関する新たな資料を提示し、従来の常設展示の補完内容として」（塚田 2006：212）の二つの地域テーマ展示コーナーが設置された。2014 年のリニューアル完了後、常設展示のセクションにおいて、「山地」「高原」など地理的表現によって多民族が暮らしていることを伝える方法は、「宗教と文字」「華僑・華人」といった族群（ethnic

group) の融合、国民・国籍の流動などより精練な概念の提示に変えた（国立民族学博物館編 2014a）。

「伝統的な」民具は、その素材から見ると、百年千年経っても壊されずに残る物ではない。日常生活で使われるため、蒐集された時点では、むきずよりボロボロのように見えることが多いかもしれない。何より、博物館が大事にされている「宝物」に比べれば、民具はあまりにも重視されることがなく、淘汰されやすく（古くなったら新しい物を購入し、あるいは機能性がより良い物に取り替え）、より短命に見える。このような物に織られている「中国」は決して「古い」とはいえないだろう。しかしながら、博物館はいかに「時間」を追うようにしても、「現代に焦点を当てた展示はすぐに古くなる」（吉田 2006：189）といった窮地から抜け出せない。博物館に入った物は、過ぎ去った時を代表すると思われがちである。

「現在」や「現代」といった時間用語は隠喩的であり、特に博物館の文脈において、それは時間の区切りを境としてある地域に対する異なる見方も意味している。考えてみると、「中国地域の文化」が開設されて以来、実は、「領土」「族群」「国民」といった「概念」に触れつつ、そこに展示されているのは、すでに現代国家としての中国である。また、21 世紀に入ってから、中国で蒐集された民具及びその展示の変化からも、時間上の意味での「現代」に存する中国を捉えようとする意欲を表している。だが、民博の趣旨は、通時的な視点、しかも単一の時系列から「中国文化」の連続性・包括性を示すより、多民族が有する「中国」という空間の中で文化の異質・不均等性及び複数の時間が存することを現すのである。それゆえ、「国民国家」や「自民族中心主義」のナラティブからの脱皮が見える一方、展示においてエスニック・アイデンティティの表徴と見なされる文化的要素がより強調されている。

民博において「暮らし」を展示することは、実際そこから生活主体としての個々の人間とその日々の生活実践を把握しようとするのではなく、その地域の一般的な「生活様式」を見いだし、文化の形態を説明するための「暮らし」の形式だけを捉えることを意味しているのである。このように、展示場で構築された「中国」像は脱経済中心・脱政治エリート中心・脱文字中心であるものの、「漢族・少数民族」「伝統文化の継承・変容」といった図式にはめ込まれない人間の多面性や、物との多面的な関わり方を見失わせる危惧がある。

おわりに

本稿では、物の移動に着目しつつ、1979 年から 2014 年の間、民博が主導した中国における民具蒐集活動の実態を考察した。グローバル化に伴い、人と物の流動は容易に想像されるとはいえ、本稿で示したように、ローカルにある文化を的確に伝達するための「越境」は決して簡単なことではない。

1979 年に民族文化宮と協定してから、民博は中国での民具の調査蒐集活動を本格的に展開し、79 年の初収集は主に北京にある民族文化宮で行われた。その際、収集された民具の一部は中国側が民博の要望に応じて事前に購入した物で、一部は中国側からの贈呈品である。当時、民博の研究者たちは長沙・桂林・上海などにも案内され、立ち寄った先でも民具を収集したが、基本的に「農業、牧畜、狩猟、漁撈などの生産に関する用具類」と「衣食住をはじめ、楽器、遊びにいたるまでの生活に関す

る用具類」の二種類に限られている。

1981 年に入り、収集された民具の種類が増え、収集地域及び収集の対象となる少数民族も多様になった。中国での民具収集は確実に進展していたが、それは民博側の研究者たちが民族文化宮に集められた物を点検し、受領するかたちで行われ、研究者たち自身が現地で行った蒐集活動による結果ではなかった。とはいえ、同時期に、研究者たちがインド、ネパール王国、香港あるいは東京都内で「中国」の民具を実際に蒐集したこともあった。

このような多様なルートを通じて蒐集を継続した結果、1983 年 11 月「中国地域の文化」の常設展示の開設へ至った。この展示場を開設するまでは、民博側が民族文化宮を介して年一回の頻度で中国で民具の収集を行った。民具コレクションは確実に充実してきたが、このように集められた物に関する詳細な情報は不足しており、当初から問題とされていた。

1990 年代後半から現地への蒐集制限が緩和され、97 年以降、民族文化宮を通じなければ蒐集できないということとはなくなった。現地での蒐集活動では研究者の研究課題と関連する民具が集められ、その情報をより精確に把握することができるようになる一方、これまで未経験の複雑な購入手続きや通関手続きにも直面しなければならなかった。また、日本人研究者が現地で蒐集を行う際には、博物館や研究所などの機関からの協力が不可欠であった。

1990 年代以降の蒐集活動においては、民具の枠が広げられ、現代化に伴う変化を見せる各民族の生活用品が積極的に集められ、伝統的な生活用品が観光商品へと転換した中国の少数民族の生活変化の様相も展示された。他方、漢民族の民具が 2008 年以降の蒐集活動によって拡充され、それに伴い、1980 年代に収集された情報不足の物の入れ替えも意識的行われた。

2002 年の耐震改修工事や 2008 年から始まった民博における常設展示の新構築により、民具蒐集や展示手法の柔軟さがある程度見えるものの、2014 年にリニューアルが完了した⁽¹⁸⁾「中国地域の文化」展示場において、エスニック・アイデンティティーの表徴と見なされる文化的要素が強調されることは相変わらずである。

「民族」を単位として文化の多様性を説明する際、「文化共同体」の創出は避け難くなる。一つ一つの「共同体」を取り上げて文化の異質性を唱えるに伴い、同じ共同体に入った人間は均一なものに見なされやすい。民博の中国民具は特に中国における多民族の生活様式を具象化する手段にされ、民具を通して中国に暮らしているさまざまな身分を有する人々とその異なる生き方を提示することができなかった。民族学博物館であるゆえ「民族」という単位で「暮らし」を展示するのは当然であるにせよ、民族学博物館であるからこそ、「民族」という「集団」にのみ込まれてもなお、そこにすべてを還元できない鮮やかな人間像も思い起こさせるべきではないかと思う。さらに、個々の人々が日々の営みにおいて物とどのように接触し、物をどのように語っているのか、また「民具」と称する物がいかに彼らの日常に取り込まれ、あるいは取って代わられ、「不在」となっているかという状況など、現地の住民と物との多元的な交渉から「中国」を描き出すことも可能だったのではないか。

上述したように、本稿では民博の内部の視点ではなく、その外部に立って、民博に収蔵されている中国の民具コレクションの形成過程や展示場の変化を整理し、そこに具象化された「中国」を論じてみた。言うまでもなく、1970 年代、中日両国の国交が樹立されることにより、日本まで運ばれたこれらの民具は、中国へのまなざしを表している一方、日本文化を改めて問うことにも直結している。

その意味では、民博に集められてきた中国の民具は、中世から近世にかけての唐物や近代における流失文物などと共に、文化の様相や国家関係のあり方を探求する手がかりを与えてくれる。今後の課題としては、それらの民具を入り口として近現代中国の社会と文化に注目し、物の流通や学術の交流も含めた新たな中日文化交渉史を探ってみる。

付記

本論は令和4年度国立民族学博物館特別共同利用研究員としての研究活動に基づくものです。本論執筆の際に、お力添えいただいた民博の指導教員である韓敏先生に深く感謝申し上げます。インタビューや質問に応じてくださった塚田誠之先生のご協力なしには本論を書き上げることはできませんでした。また、展示場の案内や蒐集活動に関する写真の説明など温かくご対応くださった野林厚志先生に御礼申し上げます。民博に滞在中、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻の劉丹氏にご助力をいただいたことにも感謝の意を表します。

註

- (1) 1950年『民具標本収蔵原簿』という目録が整理された。詳細は(飯田2019)を参照。
- (2) 彼が生涯にわたって蒐集した標本資料の多くは東京大学理学部人類学教室に保管されたが、民博創設後に民博に移管され、「西南中国」の調査で蒐集された標本資料もその中に含まれている。詳細は(佐々木1993)を参照。
- (3) 最近の例を挙げると：(Cliffordほか2020)、(飯田卓・ウィリアム・D・ニツキー「関西在住アフリカ出身者と民博のあいだでの協働関係の構築」第317回民博研究懇談会、2022年6月29日)。
- (4) 「民族文化宮」のWeChatの公式アカウント(微信公衆号)では、2019年2月18日に何麗「前世今生：民族文化宮與日本国立民族学博物館的交流」という一文が投稿された。その中に、1979年から1981年までのこの二つの機関の間の民具蒐集に関する詳細な記録(種類や合計金額など)や交流の実態がある程度記されている。
- (5) 民博に集められた民具は、「古い生活文化」を解明する物だけではないゆえ、本稿でいう民具は必ずしも手作りの物を指すわけではない。また使用者層は庶民に限らず、工業製品も含まれる。
- (6) 「蒐集」と「収集」は、古音や呉音はともかく、現代の日本語の発音は同じ「しゅうしゅう」であり、『大漢語林』(1992:206)によれば、「蒐」と「収」は置き換え可能であり、意味はほぼ同じように捉えている。しかし、字源に遡って『説文解字』や『廣韻』によると、二つの字の「形」「音」「義」はすべて異なり、『廣韻』によれば、むしろ「蒐」と「搜」の発音は同じく、さらに「搜」の本来の字は「叟」であり(「搜」は「叟」の通仮字、いわゆる「同源通仮」)、探すことを意味するため、「搜」と「蒐」は「音義相同」の通仮字(正確に言えば異体字)にもなる。1955年12月22日に、中華人民共和国文化部中国文字改革委員会により公表された「關於發布第一批異体字整理表的聯合通知」によれば、1956年2月1日から、全国の新報、雑誌、図書(古書の翻刻を例外)において「蒐」という異体字は廃用され、「搜」に変えられた。現在では、一般的に「搜」は「蒐」の簡化字と見なされている。とはいえ、「蒐集」あるいは簡化字である「搜集」と「収集」はつねに混用されている。『現代漢語詞典』(2016:1200, 1245)によれば、「収集」はバラバラのものを集めて整えることを意味するのに対して、「搜集」はあっちこっち探して集めていくことを意味する。それを踏まえ、本稿は、「蒐集」と「収集」を意識的に区別して用いることとする。
- (7) 佐々木高明によると、照葉樹林文化論は、「東アジアに特有な照葉樹林帯という森林地帯に注目し、その森林帯に成立した文化の共通性と文化の発展段階を考え、その延長線上に日本文化の形成を位置づけようとしたもの」(佐々木2007:108)である。さらに彼が、西日本を「照葉樹林帯」(常緑広葉樹林)、それに対して東日本を「ナラ林帯」(落葉広葉樹林)で代表させ、日本文化に関する説明を行う。詳細は(佐々木1993)を参照。

- (8) 2001 年度以前は特別展示と企画展示に区分されていたが、それ以降は、すべて特別展示に統一されている。
- (9) その詳細は「みんぱく 標本資料詳細情報データベース」(<https://htq.minpaku.ac.jp/databases/mofull.html>) を参照。
- (10) とはいえ、その後、1997 年度以降の蒐集活動は、民族文化宮をまったく介さなくなったわけではない。
- (11) 2022 年 11 月 4 日、民博館内で野林厚志氏への聞き取り。
- (12) 民博に収蔵されている台湾原住民に関する資料の蒐集背景、経緯の詳細は(野林 2010) を参照。
- (13) 2022 年 11 月 3 日、民博館内で韓敏氏への聞き取り。
- (14) 同上。
- (15) ここでは、塚田誠之氏の回顧による物の概要のみを提示する。1999 年と 2007 年現地で蒐集された物の詳細は「みんぱく 標本資料詳細情報データベース」を参照。
- (16) 本稿では映像資料の取材回数は整理していないが、2022 年 7 月 24 日の調査時点において、みんぱくの「ビデオテーク」では公開された「中国地域」に関する映像は「狩猟と採集」「市場と交易」「衣服と装身具」「葬式」「音楽」「漁撈」「手仕事と職人」「すまい」「新年の行事」「宗教」「牧畜と畜産」「食べもの」「子ども」「まつり」「言語」「農耕」「飲みもの」「結婚式」「おどりと演劇」「生活一般」「その他」に分けられ、合わせて 81 本である。製作地、製作者の詳細については、「映像資料目録データベース」に収録され、ネット上のアクセスは可能である。
- (17) 前掲註 (11)。
- (18) ちなみに、本稿では取り上げる余裕はないが、2022 年度内に「中国地域の文化」展示場は部分的に更新された。詳細は(奈良 2023) を参照。

参考文献

日本語 (五十音順)

- 飯島善明・福岡正太 2006「標本資料の収集」国立民族学博物館編集・発行『国立民族学博物館三十年史』
- 飯田卓編 2019『国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集 1 財団法人日本民族学協会附属民族学博物館(保谷民博) 関係人名の研究』国立民族学博物館
- 梅棹忠夫 1987a「開館五年目をむかえて」『博物館長の十年：国立民族学博物館の記録』平凡社
- 1987b『メディアとしての博物館』平凡社
- 鎌田正・米山寅太郎 1992『大漢語林』大修館書店
- 栗田靖之 2000「民博の展示の課題と展望」『国立民族学博物館調査報告』(16)
- 国立民族学博物館編集・発行 1975a『民博ニュース』(2)
- 1975b『民博ニュース』(8)
- 1977『民博通信』(1)
- 1979a『民博通信』(5)
- 1979b『民博通信』(6)
- 1982『民博通信』(17)
- 1988『民博通信』(42)
- 1990『民博通信』(48)
- 1997a『民博通信』(75)
- 1997b『民博通信』(79)
- 1984a『国立民族学博物館十年史』
- 1984b『国立民族学博物館十年史資料集成』
- 1986『国立民族学博物館展示案内』
- 1995『国立民族学博物館の現状と課題：21 世紀の研究博物館をめざして 1994』

- 1996『国立民族学博物館展示案内』
- 2002『2002年ソウルスタイル：李さん一家の素顔のくらし』
- 2003『国立民族学博物館展示ガイド』
- 2008『深奥の中国：少数民族の暮らしと工芸』東方出版
- 2012『国立民族学博物館展示ガイド』
- 2014a『国立民族学博物館展示ガイド』
- 2014b『月刊みんぱく』38（5）
- 2017『国立民族学博物館展示案内』
- 近藤雅樹編 2003『日用品の二〇世紀』ドメス出版
- 齋藤玲子 2015「国立民族学博物館における1980年代までの北アメリカ先住民資料の収集について：イヌイット版画と北西海岸先住民版画を中心に」齋藤玲子編『国立民族学博物館調査報告：カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題』（131）
- 佐々木高明 1980a「中国における資料収集と調査：中国の旅から帰って」『民博通信』（8）
- 1980b「中国少数民族の研究」『毎日新聞』（1月30日夕刊）
- 1982『照葉樹林文化の道：ブータン・雲南から日本へ』日本放送出版協会
- 1993『日本文化の基層を探る：ナラ林文化と照葉樹林文化』日本放送出版協会
- 編 1993『民族学の先覚者：鳥居龍蔵の見たアジア』国立民族学博物館
- 1997『日本文化の多重構造：アジア的視野から日本文化を再考する』小学館
- 2003『南からの日本文化（上）：新・海上の道』日本放送出版協会
- 2007『照葉樹林文化とは何か：東アジアの森が生み出した文明』中央公論新社
- 2009『日本文化の多様性：稲作以前を再考する』小学館
- 2013『日本文化の源流を探る』海青社
- 芹澤知宏・志賀市子編 2008『日本人の中国民具収集：歴史的背景と今日的意義』風響社
- 曾士才 1990「鳥居龍蔵の西南中国調査」鳥居龍蔵写真資料研究会編『東京大学総合研究資料館所蔵鳥居龍蔵博士撮影写真資料カタログ第1部解説』（東京大学総合研究資料館標本資料報告（18））
- 塚田誠之 1993a「新着資料コーナー：中国壮族の生活文化」『月刊みんぱく』17（5）
- 1993b「広西靖西県壮族の歴史と現状：新着資料展示覚書」『民博通信』（61）
- 2005「中国収集工作的三大原則」『月刊みんぱく』29（5）
- 2006「東アジア（中国地域の文化）展示」国立民族学博物館編集・発行『国立民族学博物館三十年史』
- 2022「民博における私の収集について」（未刊行）
- 奈良雅史 2023「中国地域の文化展示におけるあらたな「動き」」『月刊みんぱく』47（11）
- 野村厚志 2006「地域テーマ展示」国立民族学博物館編集・発行『国立民族学博物館三十年史』
- 2010「文化資源としての博物館資料：日本統治時代に収集された台湾原住民族の資料が有する現地社会での意義」『国立民族学博物館研究報告』34（4）
- 編 2018『国立民族学博物館開館40周年記念特別展：太陽の塔からみんぱくへ：70年万博収集資料』国立民族学博物館
- 藤井裕之 2010「アチック・ミュージアムの足半収集の経緯（研究ノート）」『国立民族学博物館研究報告』35（2）
- 松園万亀雄 2008「ごあいさつ」国立民族学博物館編『深奥の中国：少数民族の暮らしと工芸』東方出版
- 丸山泰明 2006「民俗展示の史的展開：国立民俗博物館計画史における野外博物館構想の系譜」川村邦光編『近代日本における宗教とナショナリズム・国家をめぐる総合的研究』大阪大学大学院文学研究科日本学研究室
- 横山廣子・梅棹忠夫 1987「雲南・大理でのフィールド・ワーク」梅棹忠夫編『中国の少数民族を語る：梅棹忠夫対談集』筑摩書房

横山廣子 2006「地域テーマ展示」国立民族学博物館編集・発行『国立民族学博物館三十年史』
吉田憲司 2006「第二期展示基本構想」国立民族学博物館編集・発行『国立民族学博物館三十年史』

中国語（アルファベット順）

喬旦加布 2020「日本国立民族学博物館所蔵涉藏資料研究」『西藏研究』（1）
斯琴 2017「日本国立民族学博物館及其所收藏的中国資料」『文化遺産』（3）
中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編 2016『現代漢語詞典（第7版）』商務印書館

欧文（アルファベット順）

Bouquet, Mary. 2012 *Musems: A Visual Anthropology*, London, New York: Bloomsbury Publishing.
Clifford, James, Atsunori Ito, Reiko Saito, Kenji Yoshida, Isao Hayashi, Taku Iida. 2020 International Symposium “Future of the Museum: An Anthropological Perspective” *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 45 (1): 115-176.

インターネット

何麗 2019年2月18日「前世今生：民族文化宮與日本国立民族学博物館的交流」『民族文化宮』WeChat 公式アカウント http://mp.weixin.qq.com/s?__biz=MzAxNTQ4Nzk4NA==&mid=2651360540&idx=1&sn=4430e3df6aa230ed7924d98826ea7ebb&chksm=807f6b83b708e2958f9e721e5a3fbe9a0502abe585317e163cb48c1ed5b8dba6cc448dd70332&mpshare=1&scene=23&srcid=0624b3CX8U16tSd4YpQzCceJ&sharer_sharetime=1687585603317&sharer_shareid=c9188e8e38ab0d1900bce0bc26d3543a#rd（最終閲覧：2023年6月24日）

【付録】

表1 中華人民共和国国家民族事務委員会民族文化宮より日本国国立民族学博物館への贈呈品（1979年10月）

標本名	数	備考	
		製作地域	使用者／民族
衣服セット	1組・2点	広西壮族自治区南寧市	チワン（壮）族青年女性
衣服セット	1組・8点	雲南省大理白族自治村	ペー（白）族女性
衣服セット	1組・3点	雲南省昆明市路南彝族自治县	イ（彝）族青年男性
衣服セット	1組・4点	雲南省思茅市瀾滄拉祜族自治县	ラフ（拉祜）族青年女性
衣服セット	1組・3点	湖南省湘西土家族苗族自治州竜山県、永順県一帯	トゥチャ（土家）族女性
象脚鼓	1点	雲南省	タイ（傣）族
葫芦絲	1点	雲南省	ハニ（哈尼）族
芦笙	1点	貴州省	ミャオ（苗）族

『民博通信』No.8（1980年3月）及び「みんぱく標本資料詳細情報データベース」（2022年7月18日確認）より筆者作成

表2 中華人民共和国国家民族事務委員会民族文化宮が日本国国立民族学博物館のために代わって購入した民具（1979年10月）

標本名	数	備考		
		使用地域	使用者／民族	使用法
衣服セット	1組・9点	雲南省麗江市玉竜納西族自治县	ナシ（納西）族青年女性	
衣服セット	1組・4点	雲南省西双版纳傣族自治州	傣族青年女性	日常着
衣服セット	1組・5点	雲南省西双版纳傣族自治州	哈尼族女性	日常着
衣服セット	1組・6点	雲南省文山	ヤオ（瑶）族中年女性	日常着
衣服セット	1組・4点	チベット（西藏）自治区拉薩市	チベット（藏）族男性	日常着
衣服セット	1組・4点	新疆ウイグル（維吾爾）自治区喀什地区喀什市	ウイグル（維吾爾）族女性	
熱瓦甫	1点		維吾爾族	
独它爾	1点	新疆ウイグル自治区	維吾爾族	
冬不拉	1点		モンゴル（蒙古）族	
衣服セット	1組・3点		蒙古族男性	日常着
馬頭琴	1点	内蒙古自治区	蒙古族	
衣服セット	1組・4点	貴州省黔东南苗族侗族自治州麻力公社、排平公社	苗族青年女性	晴着（祭りの衣装）
衣服セット	1組・2点	湖南省湘西土家族苗族自治州竜山県、永順県一帯	土家族中年男性	晴着（祭礼用衣装）
衣服セット	1組・3点	広西壮族自治区南寧市	瑶族青年女性	

『民博通信』No.8（1980年3月）及び「みんぱく標本資料詳細情報データベース」（2022年7月18日確認）より筆者作成

表3 佐々木高明による中華人民共和国における民具の蒐集（1979年10月28日～11月9日）

蒐集時期	蒐集地域	標本名	数	備考	
				使用者／民族	その他
10月28日	雲南省昆明市	衣服セット	1組・14点	蒙古族女性	雲南蒙古族女性結婚衣裳 祭日用衣服の一部
		衣服	1点	アチャン（阿昌）族中年男性	
		衣服セット	3点	リス（傈僳）族男性	苗族鍊 苗族多須襟鍊 苗族五須鍊
		首飾り	1点	苗族	
		肩飾り	2点		
10月30日	雲南省阿拉人民公社	銀木杯	4点	藏族	舞台用衣装 雲南背包 日常着 清朝末期女子結婚衣裳 清朝末期刺繡枕布 製靴用 清末女裙 月琴、琵琶、笙、胡弓、洋琴、横笛
		金木杯	2点		
		衣服セット	1組・5点	白族青年女性	
		肩下げ袋	4点		
11月3日	湖南省長沙市	衣服セット	5点	彝族女性	
		衣服セット	4点	女性	
11月9日	上海市	枕	2点	男性、女性	
		金槌	1点	清朝中国人	
		衣服セット	3点	宮女	
		楽器	6点		

「みんぱく標本資料詳細情報データベース」（2022年7月18日確認）より筆者作成

表4 藤井知昭による中華人民共和国（民族文化宮）における民具の収集（1980年11月24日～12月14日）

標本名	数	備考
		（使用者／民族・その他）
衣服セット	1組3点	リー（黎）族 女性（老年）
衣服セット	1組3点	黎族 女性（中年）
衣服セット	1組3点	黎族 女性（青年）
衣服セット	1組4点	黎族 男性（老年）
衣服セット	1組4点	黎族 男性（中年）
衣服セット	1組4点	黎族 男性（青年）
衣服	1点	オロチョン（鄂倫春）族 女性（老年）
衣服	1点	鄂倫春族 女性
衣服セット	1組4点	鄂倫春族 女性（青年）
衣服セット	1組2点	鄂倫春族 男性（青年）
衣服セット	1組20点	ローバ（瑯巴）族 男性
衣服セット	1組10点	瑯巴族 女性
衣服セット	1組5点	藏族 女性（老年）
衣服セット	1組5点	藏族 女性（中年）
衣服セット	1組4点	藏族 女性（青年）
衣服セット	1組5点	藏族 男性（老年）
衣服セット	1組5点	藏族 男性（中年）
衣服セット	1組4点	藏族 男性（青年）
衣服セット	1組16点	ダフル（達斡爾）族 女性（老年）
衣服セット	1組13点	達斡爾族 女性（青年）
衣服セット	1組6点	達斡爾族 子供（女兒）
衣服セット	1組13点	達斡爾族 男性（老年）
衣服セット	1組5点	達斡爾族 男性（青年）
衣服セット	1組5点	達斡爾族 子供（男児）
衣服セット	1組6点	壮族 男性（老年）・男服（夏）
衣服セット	1組5点	壮族 男性（老年）・男服（冬）
衣服セット	1組4点	壮族 女性（老年）・女服（夏）
衣服セット	1組11点	壮族 女性（老年）・女服（冬）
衣服セット	1組5点	壮族 男性（青年）
衣服セット	1組6点	布鞋：底に刺繍あり
		草鞋：編模様あり
		壮族 女性（青年）
衣服セット	1組6点	壮錦頭巾：織模様あり
		綉花鞋：前と底に刺繍あり
		壮族 子供（男児）
衣服セット	1組3点	壮族 子供（女兒）
衣服セット	1組6点	瑶族 男性（老年）
衣服セット	1組8点	瑶族 男性（青年）
衣服セット	1組8点	瑶族 子供（男児）
衣服セット	1組4点	瑶族 女性（老年）
衣服セット	1組10点	瑶族 女性（青年）
衣服セット	1組11点	瑶族 子供（女兒）
衣服セット	1組4点	侗族 女性（老年）
衣服セット	1組11点	侗族 女性（青年）
衣服セット	1組17点	侗族 子供（女兒）
衣服セット	1組8点	侗族 男性（老年）
衣服セット	1組6点	侗族 男性（青年）
衣服セット	1組6点	侗族 子供（男児）
衣服セット	1組8点	スイ（水）族 女性（老年）
衣服セット	1組19点	水族 女性（青年）
衣服セット	1組6点	水族 男性（老年）
衣服セット	1組5点	水族 男性（青年）
衣服セット	1組6点	水族 子供
衣服セット	1組11点	苗族 女性（老年）
衣服セット	1組43点	苗族 女性（青年）
衣服セット	1組42点	苗族 子供（女兒）
衣服セット	1組7点	苗族 男性（老年）
衣服セット	1組8点	苗族 男性（青年）
衣服セット	1組8点	苗族 子供（男児）
衣服セット	1組9点	土族 女性（青年）
衣服セット	1組9点	土族 男性（青年）
衣服セット	1組7点	ブイ（布依）族 女性（老年）
衣服セット	1組8点	布依族 女性（青年）
衣服セット	1組6点	布依族 子供（女兒）

衣服セット	1組4点	布依族 男性（老年）
衣服セット	1組4点	布依族 男性（青年）
衣服セット	1組4点	布依族 子供（男児）
衣服セット	1組4点	蒙古族 女性（老年）
衣服セット	1組4点	蒙古族 女性（青年）
衣服セット	1組4点	蒙古族 子供（女児）
衣服セット	1組6点	蒙古族 男性（老年）
衣服セット	1組4点	蒙古族 子供（男児）
衣服セット	1組9点	サラール（撒拉）族 女性（青年）
衣服セット	1組7点	撒拉族 男性（青年）
衣服セット	1組3点	シボ（錫伯）族 女性（中年）
衣服セット	1組4点	哈尼族 女性（青年）
衣服セット	1組2点	ブーラン（布朗）族 女性
衣服セット	1組4点	サニ（撒尼）支族 女性
衣服セット	1組2点	作業服
衣服	2点	防寒着
衣服	1点	腕ぬき
衣服	1点	エプロン
衣服	1点	ベスト
衣服セット	1組2点	飾り帯
内靴	1点	
衣服	1点	男性（外衣）
衣服	1点	女性（ベスト）
長靴	1点	子供
長靴	1点	
衣服	1点	男性（外衣）
衣服	5点	女性（ワンピース）
衣服	1点	男性（老年）・ズボン
衣服	1点	女性（青年）・上衣
衣服	2点	女性（ズボン）
衣服セット	1組2点	女性（頭巾）
鞍かばん	2点	
衣服	2点	女性（上衣）
衣服	2点	作業服
布地	2点	傣族

『民博通信』No.12（1981年3月）及び「みんなく標本資料詳細情報データベース」（2022年11月18日確認）より筆者作成

表5 大丸弘による中華人民共和国の民具収集（1981年10月12日～10月31日）

収集地域		標本種類名	備考（使用者／民族）
北京市	影絵人形 楽器	琵琶、大三弦、笙、柳琴、二胡、揚琴、京鑼、木魚、套笛、唢呐、書鼓など	
北京市民族文化宮	影絵芝居道具 舞獅子	楽器、舞台用カーペット、灯り用碗、台本など	
広西壮族自治区 羅城県	衣服	男性老年・青年・子供衣服、女性老年・青年・子供衣服	ムーラオ（仫佬）族
広西壮族自治区 環江毛難族自治県	衣服	男性老年・青年・子供衣服、女性老年・青年・子供衣服	マオナン（毛難・南）族
広東省 海南黎族苗族自治州	衣服〔農具〕 〔畜産用具〕 〔飲食用具〕 〔家具〕 〔紡織〕 楽器 祭祀用具	男性・女性衣服 ヤマイモ掘り具* 牛の首かけ 杓、飯用碗 敷物、被い布 筒スカート用織機 ドラ	*黎族
雲南省 紅河哈尼族彝族自治州 元陽県	衣服	男性・女性衣服	哈尼族
雲南省 大理白族自治州 大理県	衣服	男性・女性衣服	白族
雲南省 徳宏傣族景頗族自治州	衣服	男性・女性衣服	トーアン／パラウン（崩龍）族
雲南省 徳宏傣族景頗族自治州 隴川県	衣服	男性・女性衣服	チンポー（景頗）族
	刀		

雲南省 徳宏傣族景頗族自治州 梁河県	衣服	男性・女性衣服	アチャン（阿昌）族
雲南省 怒江傈僳族自治州 福貢県	衣服	男性・女性衣服	リス（傈僳）族
雲南省 怒江傈僳族自治州 碧江県	衣服	男性・女性衣服	ヌー（怒）族
雲南省 思茅市 西盟佤族自治县	衣服	男性・女性衣服	ワ（佤）族
雲南省 思茅市 瀾滄拉祜族自治县	衣服	男性・女性衣服	拉祜族
雲南省 怒江傈僳族自治州 貢山独竜族怒族自治县	衣服	男性・女性衣服	トールン（独竜）族
甘肅省 張掖市 肅南裕固族自治县	衣服	男性青年・子供衣服、女性老年・青年・子供衣服	ユーグ（裕固）族
内モンゴル（内蒙古）自治区 鄂温克族自治旗	衣服	男性老年・青年衣服、女性老年・青年衣服	エヴェンキ（鄂温克）族
新疆ウイグル（維吾爾）自治区	楽器	熱介克、沙他尔、胡瓦他尔、骨頭鎖呐、那格拉鼓など	
チベット（西藏）自治区 錯那県	衣服	男性老年・青年・子供衣服、女性老年・青年・子供衣服	メンパ（門巴）族
チベット（西藏）自治区	衣服 刀 矢	男性・女性衣服	珞 巴 族
湖南省	〔農具〕	トウモロコシ用 播種用具	
湖南省 通道侗族自治县	〔家具〕 〔灯火用具〕 〔調理用具〕 〔飲食用具〕 〔服物〕 〔履物〕 〔農具〕 〔狩猟用具〕 〔漁撈用具〕 〔紡織〕 〔運搬具〕	衣服入れ籠 桐油灯、照明具 唐臼、甑、なれずし用桶、酸菜作り用竹容器など 煙管、弁当入れ、おこわ用おひつ、酒入れ容器、茶漉しなど 蓑、雨笠 わらじ用すべり止め 鎌、鎌入れ、モチ稲穂刈り用刀、牛糞掃除用熊手、石掘り用鋤、竜骨車など 野獣屠殺兼柴刈り用刀 捕魚用モンドリ、囲い網など 織機、紡錘車、糸巻き器、布たたき用木槌、プリーツスカート製作台など 天秤棒、竹籠、丸木船など	侗 族
湖南省 江華瑶族自治县	衣服 〔灯火用具〕 〔調理用具〕 〔飲食用具〕 〔服物〕 〔履物〕 〔農具〕 〔山樵用具〕 〔狩猟用具〕 〔運搬具〕	女性衣服 松ヤニ油灯、松明、火打ち具 米搗き用杵、湯わかしなど 碗台、煙管など 蓑、雨笠 わらじ作り具 石掘り用鋤、鎌入れ、柴刈り用刀、穂刈り具、粟乾燥用箕など 斧、伐採用具など 小鳥用銃、虎用罟、矢など 木材運搬用具	瑶 族
湖南省 寧遠県	〔農具〕 〔飲食用具〕 〔狩猟用具〕 〔山樵用具〕	粟刈り具 碗 地下動物用罟 まきばさみ	瑶 族
貴州省 黔东南苗族侗族自治州 從江県	〔飲食用具〕 〔紡織〕 〔運搬具〕	弁当入れ、酒入れ、弁当用おかず入れ 織機、棉圧搾機、糸巻き機など 藤籃	侗 族
上海	衣服	上衣、ワンピース	漢族
中華人民共和国	土人形		
香港	〔儀礼〕 〔偶像〕 衣服	仏教儀礼用具 仏像	チベット族、モンゴル族 チベット族 漢族、満族

註1：本表において、蒐集対象例に挙げられた品名の詳細は割愛した。

註2：〔 〕内の分類名は『民具蒐集調査要目』（1936）を参照した上で筆者が付したものである、以下の表も同じく。

註3：今回の収集は「民族文化宮」を介して実施したが、収集地域は「みんぱく標本資料詳細情報データベース」を用いて「中華人民共和国」をキーワード検索し抽出した結果である（当時香港はまだ中国に返還してなかったものの、データベースでは、製作地と使用地は「中華人民共和国 チベット（西藏）自治区」とあるため、これらの物も表に含めた）。

『民博通信』No. 16（1982年3月）及び「みんぱく標本資料詳細情報データベース」（2022年11月18日確認）より筆者作成

表6 長野泰彦による中華人民共和国の民具蒐集（1981年9月1日～10月10日）

蒐集地域	標本種類名		備考（使用者／民族）
インド	〔飲食用具〕 〔灯火用具〕 〔装身具〕 〔祭供品〕 〔祈願品〕 〔楽器〕 お守り箱	茶托、茶碗の蓋、器、器の蓋、チベット茶 火打石 頭飾り、耳飾り 聖水注ぎ器、聖水器、聖水うけ皿 祈禱用マニ車 シンバル、儀礼用小太鼓	チベット族（中華人民共和国チベット自治区）
ネパール王国 Kathmandu	宗教舞踊用 仮面 宗教舞踊用 小道具 六弦琴		チベット族（ブータン王国及び中華人民共和国チベット自治区）
香港	仏教儀礼用 マンダラ 仏教儀礼用 仏画		チベット族（中華人民共和国チベット自治区）

註：『民博通信』では、長野泰彦は「ヒマラヤ地域における民族資料の収集と研究のため、インド・ネパールへ出発」とあるが、データベースによると、その時に蒐集された物の中に使用地が「中華人民共和国」と記されている物がある。それゆえ、これらの物も表に含めることにする。

『民博通信』No.15（1981年12月）及び「みんぱく標本資料詳細情報データベース」（2022年11月20日確認）より筆者作成

表7 栗田靖之による「中国」の民具蒐集（1982年10月10日～11月19日）

蒐集地域	標本種類名	備考（使用者／民族）
香港	仏画 ラッパ 仏具 香炉	チベット族 チベット族 チベット族 チベット族

註：『民博通信』では、栗田靖之は「インド、ホンコン、バングラデシュ、ブータンで、南アジア地域の展示用資料収集をおこなった」とあるが、データベースによると、その時に蒐集された物の中に使用地が「中華人民共和国」と記されている物がある。それゆえ、これらの物も表に含めることにする。

『民博通信』No.20（1983年3月）及び「みんぱく標本資料詳細情報データベース」（2022年11月20日確認）より筆者作成

表8 第8展示場・東アジア展示場

名称	面積（m ² ）	展示標本数（点）	写真パネル（点）	展示構成
朝鮮半島の文化	309	371	38	芸能・信仰・祭祀 衣食住
中国地域の文化	646	773	8	祭りと芸能 都市の生活 江南の生活 山地の生活 高原の生活 草原の生活
アイヌの文化	332	517	194	アイヌの家と生活領域 アイヌの生業 アイヌの信仰
日本の文化	1558	2690	718	祭りと芸能 日本のすまい くらしの用具 くらしの工芸 船と漁具

『国立民族学博物館展示案内』（1986）より筆者作成

表9 東アジア展示場・中国地域の文化（展示資料）

展示セクション	資料種類名		蒐集・製作地域	備考（使用者／民族）
祭りと芸能	人形	上から掌中劇用あやつり人形 人形 獅子	福建省 河北省 陝西省	漢族 漢族 漢族
	少数民族の楽器	象脚鼓など 大三弦 芦笙 馬頭琴 など	雲南省	タイ族 イ族 トン族、ミャオ族 モンゴル族
	漢民族の楽器 竜舞 竜頭 鳳 花嫁の輿	唢呐など	北京市 北京市 貴州省 北京市 北京市	漢族 漢族 ミャオ族 漢族 漢族
都市の生活	四合院住居（1/10 模型）		北京市	漢族
江南の生活	漁船と漁具	鉤船 投網		
		刺網	江西省	漢族
		手網 延縄 櫓		
	帆			
	雨おおいなど			
	江南の農家（複製）	門楼	江西省	漢族
	香炉をのせる台		江西省	漢族
	農家の台所用品	かご 粥入れ 蒸籠		
	江南の農耕用具	犁 竜骨車 鋤など		
	一輪車		江西省進賢県、樂平県	漢族
	ひしゃく			
	米すくい			
	火かき棒と灰かき			
	包丁とまな板			
	箸たて			
山地の生活	みの・笠			四川、雲南、貴州、湖南、広 西省・区の山地民、ミャオ 族、ヤオ族、マオナン族、ト ン族、チワン族、ハニ族
	背負いかご			ハニ族、ヤオ族
	箕 掘棒		雲南省 湖南省	ハニ族 ヤオ族
	踏み鋤		広西チワン（壮）族 自治区	ヤオ族
	穂摘み具			
	からさお		広西チワン族自治区	チワン族
	民族衣装		貴州省 雲南省	ミャオ族 ヤオ族
	大凉山イ族の飲食器	木製漆器の一セット	四川省	イ族
高原の生活	マニ車			
	銀製食器		西藏自治区	チベット族
	ツァンパ入れと茶袋 バター茶作り用桶			
	背負いかご 野菜かご			ロツバ族 ロツバ族
	ふるい		西藏自治区	チベット族
	ラッパ 経文入れ			チベット族 チベット族
	銅製盆と水さし			ウイグル族

草原の生活	じゅうたん	新疆ウイグル自治区	ウイグル族
	荷袋		カザフ（哈萨克）族
	ラクダ用鞍 ウマ用鞍	内蒙古自治区・新疆ウイグル自治区	カザフ族・モンゴル族

『国立民族学博物館展示案内』（1986）より筆者作成

表 10 民博の教員たちによる中華人民共和国における中国の民具蒐集活動（1979-2013）

蒐集時期	蒐集委員	備考
1979 年 10 月 20 日～11 月 10 日 1980 年 11 月 24 日～12 月 14 日 1981 年 9 月 1 日～10 月 10 日 1981 年 10 月 12 日～10 月 31 日 1982 年 10 月 10 日～11 月 19 日 1982 年 12 月 5 日～12 月 30 日 1983 年 5 月 11 日～6 月 3 日 1985 年 6 月 28 日～7 月 24 日 1987 年 6 月 24 日～7 月 14 日 1988 年 11 月 23 日～1989 年 1 月 23 日	佐々木高明 藤井知昭 長野泰彦 大丸 弘 栗田靖之 松原正毅 松原正毅 周 達生 藤井知昭 長野泰彦	大丸弘、藤井知昭同行 インド、ネパール、香港 藤井知昭、周達生同行 香港 周達生、瀬川昌久同行 『民博通信』No. 45（1989 年 8 月）には「中華人民共和国、ネパール、インド、バングラデシュでの、ガンジス河流域の複合文化形成動因の比較研究」、および、「海外標本資料収集」をおこなったと記されている
1989 年 12 月 11 日～12 月 30 日	利光有紀	広西民族学院（現・広西民族大学）に滞在していた塚田誠之が南寧から北京へ手伝いに行くことになった
1991 年 11 月 2 日～11 月 30 日 1992 年 6 月 24 日～7 月 19 日	塚田誠之 庄司博史	佐々木高明同行 主な目的は標本資料の蒐集ではなく、『民博通信』No. 59（1993 年 2 月）によれば「アルタイ地域の言語人類学的研究」を行ったとある
1992 年 8 月 5 日～8 月 19 日	塚田誠之	主な目的は標本資料の蒐集ではなく、『民博通信』No. 59（1993 年 2 月）によれば「チュワン族の伝統的行事「中元節」に関する実態調査」を行ったとある
1993 年 12 月 8 日～1994 年 1 月 5 日 1995 年 10 月 12 日～11 月 12 日 1997 年 9 月 16 日～10 月 15 日 1999 年 2 月 5 日～3 月 10 日 1999 年 10 月 27 日～11 月 4 日 1999 年 11 月 8 日～11 月 18 日 2001 年 10 月 11 日～11 月 13 日 2001 年 11 月 22 日～12 月 6 日 2003 年 8 月 12 日～9 月 10 日 2005 年 12 月 7 日～12 月 30 日 2006 年 11 月 3 日～12 月 2 日 2007 年 5 月 11 日～6 月 9 日 2007 年 9 月 16 日～10 月 14 日 2007 年 12 月 11 日～12 月 14 日 2008 年 7 月 20 日～8 月 13 日 2008 年 12 月 25 日～2009 年 1 月 2 日 2009 年 2 月 17 日～2 月 24 日 2009 年 7 月 27 日～8 月 2 日 2010 年 2 月 7 日～3 月 1 日 2010 年 3 月 19 日～3 月 25 日 2010 年 8 月 7 日～8 月 25 日 2011 年 2 月 21 日～3 月 13 日 2011 年 3 月 17 日～3 月 20 日 2012 年 12 月 6 日～12 月 12 日 2012 年 11 月 21 日～11 月 26 日 2013 年 2 月 27 日～3 月 7 日 2013 年 3 月 23 日～3 月 26 日 2013 年 3 月 24 日～3 月 29 日	塚田誠之 横山廣子 塚田誠之 長野泰彦 長野泰彦 塚田誠之 長野泰彦 塚田誠之 塚田誠之 塚田誠之 横山廣子 長野泰彦 韓 敏 韓 敏 韓 敏 韓 敏 横山廣子 韓 敏 韓 敏 塚田誠之 韓 敏 韓 敏 陳天璽 陳天璽 野林厚志 韓 敏	佐々木高明、周達生、藤井知昭、田村克己同行 佐々木高明、横山廣子同行 塚田誠之、小長谷有紀、野林厚志同行 台湾 台湾

註 1：蒐集時期については、数国にまたがる蒐集の場合は、本表で記された時期はこの総合時期である。

註 2：1997 年までの蒐集活動は、民族文化宮を介して行われた。その時、蒐集委員は一人だが、実際には数名の同行者がいた。

註 3：本表は標本資料蒐集を目的とし現地に赴いたという基準のもとに作成したものである。しかし、例えば、備考欄に記したように、研究のため、もしくは映像資料の製作を目的として標本資料の蒐集も兼ねたケースは筆者が確認できる範囲のみ記載した。

註 4：本表に統計された時期や回数は、必ずしも実際の蒐集回数に一致するとは言いきれない。理由としては、まず、教員たちは科研費で海外へ渡航し、調査を行う途中でついでに標本資料を購入する場合もある。ただ、その場合は『民博通信』『国立民族学博物館研究年報』では、標本資料収集を行うといった記録は残されておらず、内部の出張書類を確認しない限り判断しにくい。そして、蒐集された標本資料は、2023 年 7 月の時点ですべてがデータベースに登録されていなかったため、仮に登録された情報から蒐集回数を全般的に把握することは不可能である。さらに、登録されている標本資料は、必ずしも民博の経費で購入したものではなく、教員たちが自費で購入し、のちに民博に寄贈したものも含まれている。それゆえ、データベースに記されている標本資料の蒐集時期から教員たちの蒐集回数を類推しても一致しないところが多い。以上のことを踏まえ、本表で確認された情報は限界があることをご了承ください。

『民博通信』No. 8-No. 88（1980-2000）、『国立民族学博物館研究年報』（1999-2012）、「みんぱく標本資料詳細情報データベース」（2023 年 7 月まで更新されたデータ）、「中華人民共和国・国家民族事務委員会民族文化宮と日本国・国立民族学博物館との交流略史」（周達生）より筆者作成

表 11 利光有紀による中華人民共和国における中国の民具蒐集（1989 年 12 月 11 日～12 月 30 日）

収集地域	標本種類名		備考 (使用者／民族)
江蘇省 呉県	〔家具〕 〔服物〕 〔履物〕 〔育児用具〕 〔農具〕 〔漁撈用具〕 〔その他特種職業用具〕 〔運搬具〕	木製便器 腰簍、女性用頭巾・衣服、男女性用前掛け 女性用靴（綉花鞋など） 子供用涎掛け・帽子など 鋤刀 やす ペンチ、金槌、鑿 操船用具	漢
河北省 曲周県	〔信仰・行事〕	竜舞用提灯	
陝西省渭南市	〔家具〕 〔調理用具〕 〔飲食用具〕 〔服物〕 〔装身具〕 〔育児用具〕 〔農具〕 〔山樵用具〕 〔紡織〕 〔畜産用具〕 〔交易用具〕 〔運搬具〕 〔婚姻〕 〔祭供品〕 〔楽器〕 〔祈願品〕 〔その他特種職業用具〕 情報不足、未分類	のれん、枕、アイロン、鏡、鏡台、文房具入れ容器など 柄杓、鍋、庖丁、フライ返し、臼、月餅製作用型、たわしなど 鉢、碗 草帽、腕カバー、腰帶、男・女性用衣服、ハンカチ 女性用髪飾り、櫛、耳被いなど 乳児背負い帯、子供用襟飾り・腹掛けなど 犁、鎌、鍬、箕など 手斧など 織機、糸紡ぎ器、針山など 牛用くびき、鞍 財布 天秤棒、手桶など 婚礼用頭巾 祖先祭祀用香炉・燭台・花瓶 木魚 香袋 煉瓦製作用具 切り絵	族
四川省 成都市	川劇用脚本 川劇用衣服	男性・女性衣服	
四川省 塩源县	〔家具〕 〔飲食用具〕 〔服物〕 〔装身具〕 未分類	洗面器 酒入れ容器、ツェンパ入れ容器など 肩掛け、ベストなど 指輪 錠	納 西 族
広西壮族自治区 靖西県	〔家具〕 〔灯火用具〕 〔調理用具〕 〔飲食用具〕 〔服物〕 〔運搬具〕 〔履物〕 〔装身具〕 〔育児用具〕 〔農具〕 〔漁撈用具〕 〔信仰・行事〕 〔偶像〕 〔玩具〕	のれん、ソファーカーバー、敷物、掛け布団、うちわ、座椅子など 火鉢 土鍋、まないたなど 水入れ容器、箸立て、塩入れ容器、フライ返しなど 壮族（男性・女性青年・中年）衣服、雨具 籠、天秤棒、手提げ籠 女性用靴（綉花鞋） 肩下げ袋 乳児用おくるみ、乳児背負い帯、子供用帽子・靴 笠 犁、鍬など 筥 巫女用衣服・装身具 あやつり人形 手鞠	壮 族
広西壮族自治区 金秀県	〔飲食用具〕 〔運搬具〕 〔農具〕 〔漁撈用具〕 〔楽器〕	臼、煙管など 籠、背負い袋、天秤籠 犁、箕など 魚籠 太鼓	瑶 族
	〔家具〕 〔調理用具〕 〔飲食用具〕 〔服物〕 〔履物〕	毛布、テーブル掛け、家具掛け、壁掛け 片手鍋、やかん 杓、箸立て、弁当箱 麦藁帽子、帯留め、裾飾り、腰帶、女性用頭巾 女性用靴（綉花鞋）、わらじ	白

雲南省大理白族自治州 大理市	〔育児用具〕 〔農具〕 〔交易用具〕 〔その他特種職業用具〕 〔信仰・行事〕 〔玩具〕	ゆりかご、ゆりかご用掛け布団、乳児背負い 帯、子供用前掛け・帽子・サンダルなど 鎌、馬鍬 財布 鍬（泥瓦職人用具） 旗（裁袂旗、田植え行事に用いる） 手鞠、布馬	族
雲南省大理白族自治州 洱源县	〔信仰・行事〕	祖先祭祀用紙	
雲南省 劍川県	〔家具〕 〔履物〕 未分類	椅子 女性用靴、綉花鞋 木彫（獅子）	
西藏自治区	〔行旅具〕	牛皮船、牛皮船用櫓	チベット族
内モンゴル（内蒙古）自治区フフホト（呼和浩特）市	〔灯火用具〕 〔服物〕 〔飲食用具〕 〔装身具〕 〔紡織色染〕 〔信仰・行事〕 〔楽器〕 〔偶像〕	灯明用碗、燭台 男性用長衣・腰帯 碗、携帯用箸とナイフ、煙管 腕輪など ボタン 香炉 馬頭琴 仏像	モ ン ゴ ル 族
内モンゴル（内蒙古）自治区シリントグ（錫林郭勒）盟	〔飲食用具〕 〔服物〕 〔装身具〕	酒杯、嗅ぎたばこ入れ容器など 女性用長衣・腰帯 胸飾り、腕輪など	
内モンゴル（内蒙古）自治区ウランチャブ（烏蘭察布）盟集寧市	〔飲食用具〕	茶筒	
内モンゴル（内蒙古）自治区ジョーオダ（昭烏達）盟	〔装身具〕	髪飾り	
内モンゴル（内蒙古）自治区イフジョー（伊克昭）盟	〔家具〕 〔調理用具〕 〔飲食用具〕 〔装身具〕 〔畜産用具〕 〔祈願品〕 〔紡織色染〕 〔その他特種職業用具〕	座布団 チーズ製作用具 キビ、贈答用茶など 首飾り 子羊用哺乳瓶 数珠 裁縫用具入れ容器 革製品製作用具	

『民博通信』No.48（1990年3月）及び「みんぱく標本資料詳細情報データベース」（2022年11月6日確認）より筆者作成

表12 塚田誠之による中華人民共和国（民族文化宮）における中国の民具蒐集（1991年11月2日～11月30日）

収集地域	標本種類名		備考 （使用者／民族）
チベット（西藏）自治区拉薩市	〔服物〕 〔履物〕 〔祭供品〕 〔楽器〕 〔偶像〕	僧侶用袈裟 僧侶用長靴 儀礼用ランプ、神水入れ容器など 儀礼用シンバル 仏像	チベット族
チベット自治区 日喀則市	〔服物〕 〔楽器〕 〔祭供品〕 〔祈願品〕	僧侶用帽子 僧侶用ラッパ、儀礼用楽器 曼陀羅、神水入れ容器、神符入れ容器など マニ車、数珠	
新疆ウイグル（維吾爾）自治区喀什市	〔家具〕 〔調理用具〕 〔飲食用具〕 〔農具〕 〔紡織〕 〔畜産用具〕 〔その他特種職業用具〕 〔楽器〕	衣装入れ箱 ナン作り用容器、唐辛子入れ容器など 皿 除草用スコップ、土掘り用鍬など 絨毯織り用小刀・櫛など ロバ用鞍、馬用鞍 氷割り用のみ 熱瓦普、手鼓	維吾爾族
新疆ウイグル自治区 吐魯番市	〔調理用具〕	干しぶどう作り具	
新疆ウイグル自治区 塔什庫爾干塔吉克自治県	〔家具〕 〔飲食用具〕 〔服物〕 〔履物〕 〔装身具〕 〔畜産用具〕	枕カバー 粥すくい用杓子 男性用帽子 女性用長靴 女性用髪飾り 馬用腹帯・鞍敷	タジク（塔吉克）族

新疆ウイグル自治区 阿圖什県	〔家具〕 〔飲食用具〕 〔農具〕 〔服物〕 〔履物〕	敷・掛け布団、枕、テント内装用カーテン、読経用敷物、テント囲い用すだれなど 乳汲み用杓子、乳製品入れ用碗など 農作業用シャベル 男性・女性衣服・帽子 男性用靴	キルギス（柯爾克孜）族
新疆ウイグル自治区 塔城市	〔飲食用具〕	鍋つかみ、茶壺敷、茶葉入れ用袋	哈薩克族
	〔家具〕 〔調理用具〕 〔畜産用具〕	盆、アイロンなど 菓子作り器 馬用鞍	タタール（塔々爾）族
	〔調理用具〕 〔飲食用具〕 〔畜産用具〕	バター作り用皮袋 タバコ葉つぶし用木臼 ラクダ用鼻木	モンゴル族
新疆ウイグル自治区 阿勒泰市	〔家具〕 〔飲食用具〕	衣装掛け具、炉用三脚など 鍋敷	哈薩克族
新疆ウイグル自治区 伊犁哈薩克自治州	〔家具〕 〔調理用具〕 〔農具〕 〔紡織〕 〔衛生保健用具〕	食事用テーブル、灰かき棒 調味料入れ用容器 除草用シャベル、鋤 糸送り器など 治療用吸い玉	錫伯族
新疆ウイグル自治区 伊寧市	〔調理用具〕 〔飲食用具〕 〔楽器〕	卵焼き用フライパン、ミンチ作り器など 米櫃、魚料理用皿、食事用スプーンなど 巴揚、巴拉來卡	オロス（俄羅斯）族
内モンゴル自治区	〔服物〕 〔履物〕 〔畜産用具〕 情報不足、未分類	帽子 男性用靴 馬用鞍敷 旗	モンゴル族
内モンゴル自治区 伊克昭盟	〔飲食用具〕 〔家具〕 〔灯火用具〕 〔紡織色染〕 〔畜産用具〕	煙管、木皿、碗など 木箱 馬形火鎌 裁縫用具入れ用袋、指貫、ボタンなど 乳しぼり用桶	
福建省上杭県	〔農具〕 〔運搬具〕 〔調理用具〕 〔漁撈用具〕	馬鋤、犁など 籠 水汲み用容器 鵜飼用漁用捕魚具など	客家
福建省 光澤県	〔服物〕 〔漁撈用具〕	漁民用笠、簍など 魚籠など、舟こぎ棒、鵜飼用漁用筏	
福建省 福安県	〔履物〕 〔楽器〕 〔祭供品〕 〔儀礼〕	男性・女性・子供用わらじ、男性用下駄・雨靴 儀礼用鈴・角笛・木魚など 水入れ容器 儀礼用スカート、儀礼用冠、儀礼用鞭・魔除け具、儀礼用燭台など	シェ（畚）族
湖南省湘西土家族苗族自治州	〔紡織色染〕	織布	土家族
山東省済寧市	〔家具〕 〔玩具〕 〔紡織色染〕 香入れ袋	のれん 獅子 裁縫用具入れ用籠	漢族
海南省 瓊中県 吉林省 延辺朝鮮族自治州 四川省 成都市	〔履物〕 〔履物〕 情報不足、未分類	男性・女性用わらじ 男性・女性用下駄 楽器	黎族 朝鮮族 苗族
広西壮族自治区 隆林各族自治県 委楽郷 委楽村	〔服物〕 〔履物〕	女性用上着・頭巾など 女性用靴	壮族
広西壮族自治区 隆林各族自治県 蛇場郷 馬場村 広西壮族自治区 隆林各族自治県 蛇場郷 高山	〔服物〕 〔服物〕	女性用前掛け・上着など 女性用前掛け・腰帯など	苗族
貴州省 台江県	〔家具〕 〔服物〕 〔装身具〕	壁掛け 女性用上着・スカート 肩下げ袋	
貴州省 黔南布依族苗族自治州	〔服物〕	女性用腰巻・上着	

『民博通信』No.56（1992年3月）及び「みんぱく標本資料詳細情報データベース」（2022年11月6日確認）より筆者作成

表 13 塚田誠之による中華人民共和国における中国の民具蒐集

蒐集時期	蒐集地域	備考 (使用者／民族)
1991 年 11 月 2 日～11 月 30 日	チベット（西藏）自治区 拉薩市 チベット自治区 日喀則市	藏族
	新疆ウイグル（維吾爾）自治区喀什市 新疆ウイグル自治区 吐魯番市	維吾爾族
	新疆ウイグル自治区 塔什庫爾干塔吉克自治県 新疆ウイグル自治区 阿圖什県 新疆ウイグル自治区 塔城市 新疆ウイグル自治区 阿勒泰市 新疆ウイグル自治区 伊犁哈萨克自治州 新疆ウイグル自治区 伊寧市	塔吉克族 柯爾克孜族 哈萨克族、塔々爾族 哈萨克族 錫伯族 俄羅斯族
	内蒙古自治区 内蒙古自治区 伊克昭盟	蒙古族
	福建省 上杭県 福建省 光澤県	客家
	福建省 福安県 湖南省 湘西土家族苗族自治州 山東省 済寧市 海南省 瓊中県 吉林省 延辺朝鮮族自治州 四川省 成都市 広西壮族自治区 隆林各族自治县 委楽郷 委楽村	畲族 土家族 漢族 黎族 朝鮮族 苗族、侗族 壮族
	広西壮族自治区 隆林各族自治县 蛇場郷 馬場村 広西壮族自治区 隆林各族自治县 蛇場郷 高山	苗族
	広西壮族自治区 三江県 貴州省 台江県 貴州省 黔南布依族苗族自治州	瑶族 苗族 布依族
1993 年 12 月 8 日～1994 年 1 月 5 日	内蒙古自治区伊克昭盟 広西壮族自治区 南丹県 八墟郷 広西壮族自治区 南丹県 里湖郷	蒙古族 瑶（白褲瑶）族
	広西壮族自治区 南丹県 月里郷 広西壮族自治区 南丹県 城関鎮	壮族
	山東省 荷沢市	漢族
	海南省 白沙県 海南省 陵水県 海南省 通什市 海南省 三亞市 海南省 瓊中県 海南省 保亭県 海南省 東方県 海南省 樂東県 海南省 昌江県	黎族
	山西省 大同市 湖北省 当陽県	漢族
	貴州省 安順市 貴州省 三都県 貴州省 丹寨県 貴州省 台江県 貴州省 從江県 広西壮族自治区 都安瑶族自治县 西藏自治区 拉薩市	布依族 水族 侗族、苗族 苗族 壮族 藏族
1995 年 10 月 12 日～11 月 12 日	広西壮族自治区 南丹県 広西壮族自治区 南丹県 中寨郷 広西壮族自治区 三江侗族自治县 雲南省 德宏傣族景頗族自治州 潞西県 雲南省 金平県 者米郷 丁清村 雲南省 金平県 金河鎮	毛南族 苗族 侗族 景頗族 瑶（広東瑶）族 瑶族
	雲南省 金平県 金河鎮 伍家寨 雲南省 金平県 金河鎮 哈尼田郷 上寨	哈尼族
	雲南省 金平県 金河鎮 水沟寨 雲南省 金平県 老勐郷 曼青寨 雲南省 金平県 銅廠郷 雲南省 金平県 哈尼田郷 哈尼田村	彝族 苗（黒苗）族 苗（花苗）族 瑶（紅頭瑶）族

1995 年 10 月 12 日～11 月 12 日	雲南省 金平県 勐拉郷 旧勐寨	傣族
	雲南省 金平県 勐拉郷 普洱中寨	
	雲南省 緑春県 大水沟郷 垭晒寨	哈尼族 瑶族 哈尼族 彝族
	雲南省 緑春県 牛孔郷 莫東村	
	雲南省 緑春県 大興鎮 那保果寨	
	雲南省 緑春県 牛孔郷 土嘎寨	
	雲南省 元陽県 新街鎮 麻栗寨	哈尼族
	雲南省 元陽県 牛角寨郷	
	雲南省 元陽県 南沙郷 干冲村	傣族 彝族 阿昌族 苗（黒苗）族 苗（長角苗）族
	雲南省 元陽県 新街鎮 水普龍寨	
	雲南省 梁河県	
	貴州省 貴定県	
	貴州省 六枝特区 梭戛郷	
	貴州省 六枝特区	苗族
	貴州省 從江県	
	貴州省 劍河県	
	貴州省 丹寨県	
	貴州省 松桃県	
	貴州省 黔東南州 黄平県	
1999 年 2 月 5 日～3 月 10 日	貴州省 榕江県	侗族 彝族
	貴州省 威寧県	
	貴州省 鎮寧県	布依族
	貴州省 紫雲県	
	貴州省 望漠県	
	四川省 涼山彝族自治州	彝族
	チベット（西藏）自治区 林芝県	藏族
	チベット（西藏）自治区 山南地区 貢嘎県 貢嘎郷	
	チベット（西藏）自治区 山南地区 乃東県 沢当鎮	
	チベット（西藏）自治区 拉薩市 当雄県	
	チベット（西藏）自治区 那曲地区 那曲県 那曲鎮	
	チベット（西藏）自治区 拉薩市 曲水県 雪村	
	チベット（西藏）自治区 拉薩市	
	甘肅省 瑪曲県 欧拉郷	
	甘肅省 甘南州 合作鎮	
	甘肅省 夏河県 桑科郷	
	青海省 湟中県 魯沙鎮	
	青海省 共和県 車巴郷	
2001 年 10 月 11 日～11 月 13 日	青海省 互助県 台子郷	土族 民族不明
	陝西省 鳳翔県 紙坊郷 六营村	
	広西壮族自治区 靖西県	壮族
	広西壮族自治区 靖西県 南坡郷	
	広西壮族自治区 靖西県 大道郷	
	広西壮族自治区 靖西県 化峒郷	
	広西壮族自治区 靖西県 禄峒郷	
	広西壮族自治区 靖西県 新靖鎮	
	広西壮族自治区 靖西県 新靖鎮 旧州街	
	広西壮族自治区 靖西県 新靖鎮 新村街	
	広西壮族自治区 靖西県 新靖鎮 南門街	
	広西壮族自治区 靖西県 新靖鎮 新生街	
	広西壮族自治区 靖西県 新靖鎮 亮表村	
	広西壮族自治区 靖西県 新靖鎮 新華街	
	広西壮族自治区 靖西県 湖潤鎮 新興街	
	広西壮族自治区 靖西県 安德鎮	
	広西壮族自治区 靖西県 安德鎮 中華屯	
	広西壮族自治区 靖西県 安德鎮 開墾屯	
2001 年 10 月 11 日～11 月 13 日	広西壮族自治区 忻城県 城関鎮 中和街 45 号	
	広西壮族自治区 靖西県 竜邦鎮 大莫村	苗族
	広西壮族自治区 南寧市	民族不明
	広東省 順徳市	
	広東省 広州市	
	貴州省 雷山県	苗族
	貴州省 雷山県 丹江鎮	
	貴州省 雷山県 丹江鎮 楊排村	
	貴州省 雷山県 丹江鎮 電站寨	
	貴州省 雷山県 西江鎮	
	貴州省 雷山県 大塘郷 掌坳村	

	貴州省 從江県 雍里郷				
	貴州省 從江県 雍里郷	大洞村			
	貴州省 從江県 高増郷				
	貴州省 從江県 高増郷	大寨村			
	貴州省 從江県 高増郷	芭扒村			
	貴州省 從江県 高増郷	美德村			侗族
	貴州省 從江県 高増郷	小黄村			
	貴州省 榕江県 寨蒿鎮	晚寨村			
	貴州省 榕江県 忠誠鎮				
	貴州省 凱里市 三棵樹鎮	脚高村			苗族
	貴州省 黎平県 肇興郷				
	貴州省 黎平県 肇興郷	堂安村			
	貴州省 黎平県 肇興郷	肇興村			
	貴州省 黎平県 肇興郷	義寨村			侗族
	貴州省 黎平県 肇興郷	仁寨村			
2003 年 8 月 12 日～9 月 10 日	貴州省 黎平県 水口郷	水口村			
	貴州省 黎平県 中曹郷	佳所村			
	貴州省 黎平県 中潮郷				
	貴州省 台江県 反排郷	反排村			
	貴州省 台江県 台拱鎮				
	貴州省 台江県 革一郷				苗族
	貴州省 台江県 施洞鎮				
	貴州省 台江県 台盤郷	大寨村			
	貴州省 麻江県 杏山鎮				
	貴州省 織金県 珠藏郷	麻丫村			
	貴州省 安順市				苗（歪梳苗）族 民族不明
	貴州省 安順市 西秀区	王家山村			苗（青苗）族
	貴州省 安順市 岩腊郷	三股水村			苗（花苗）族
	貴州省 安順市 鷄場郷	甘堡村			漢族（屯堡人）
	貴州省 黔西県				苗族
2005 年 12 月 7 日～12 月 30 日	貴州省 丹寨県				苗族
	貴州省 貴陽市 北京路				民族不明
	広東省 広州市				
	北京市				漢族
	四川省 涼山彝族自治州	冕寧県			
	四川省 涼山彝族自治州	喜徳県			
	四川省 涼山彝族自治州	布拖県			彝族
	四川省 涼山彝族自治州	美姑県	候古莫村		
	四川省 涼山彝族自治州	西昌市			
	四川省 涼山彝族自治州	普格県			
	雲南省 昆明市				瑶族
	雲南省 玉溪市 新平彝族傣族自治县				傣族
	雲南省 玉溪市 新平彝族傣族自治县	漠沙鎮	龍河村		傣（傣雅支系）族
	雲南省 西双版纳傣族自治州	勐海県	打洛鎮	打洛城子村	
	雲南省 西双版纳傣族自治州	勐海県	打洛鎮	曼納罕村	
2006 年 11 月 3 日～12 月 2 日	雲南省 西双版纳傣族自治州	勐海県	打洛鎮	曼打火村	傣族
	雲南省 西双版纳傣族自治州	勐海県	勐混鎮		
	雲南省 西双版纳傣族自治州	景洪市	工艺品市場		
	雲南省 思茅市 西盟佤族自治县	翁嘎科郷	英候村		
	雲南省 思茅市 西盟佤族自治县	翁嘎科郷	班岳村		
	雲南省 思茅市 西盟佤族自治县	岳宋郷	勇隆村		
	雲南省 思茅市 西盟佤族自治县	岳宋郷	芒杏村		
	雲南省 思茅市 西盟佤族自治县	新厰郷	安漢村		
	雲南省 思茅市 西盟佤族自治县	新厰郷	新厰村		
	雲南省 思茅市 西盟佤族自治县	勐梭鎮			佤族
	雲南省 思茅市 西盟佤族自治县	勐梭鎮	它郎村		
	雲南省 思茅市 西盟佤族自治县	岳宋郷	班帥村		
	雲南省 思茅市 西盟佤族自治县	慄慄郷	土地村	班銅自然村	
	雲南省 思茅市 西盟佤族自治县	中課郷	永不落村		
	雲南省 思茅市 西盟佤族自治县	慄慄郷	打落村		
	雲南省 思茅市 西盟佤族自治县	莫窩郷	班哲村		
	雲南省 思茅市 西盟佤族自治县	西盟鎮			
	雲南省 德宏傣族景頗族自治州	潞西市	三台山郷		景頗族
	雲南省 德宏傣族景頗族自治州	潞西市	芒市鎮		
	貴州省 雷山県	丹江鎮			
	貴州省 凱里市	凱棠郷			
	貴州省 台江県	施洞鎮			苗族

	貴州省 麻江県 杏山鎮 貴州省 貴陽市	
2007 年 5 月 11 日～6 月 9 日	広西壮族自治区 百色市 靖西県	壮族
2011 年 2 月 21 日～3 月 13 日	広西壮族自治区 防城港市 東興市	京族
	広西壮族自治区 河池市 羅城仫佬族自治县 東門鎮	仫佬族
	広西壮族自治区 河池市 環江毛南族自治县 洛陽鎮 江口村	毛南族
	広西壮族自治区 河池市 環江毛南族自治县 思恩鎮	
	広西壮族自治区 河池市 環江毛南族自治县 下南郷 堂八村 上八屯	
	広西壮族自治区 河池市 東蘭県 長江郷	壮族

註：塚田誠之氏によれば、蒐集委員として蒐集活動を行う際に、実際に滞在した地域と時期については以下の通り（1991 年北京・広西、1993 年北京・広西、1995 年北京・雲南、1999 年広西、2001 年貴州、2003 年北京・四川、2005 年雲南、2006 年貴州、2007 年広西・貴州、2011 年広西）である。

『民博通信』No.56-No.88（1992-2000）、『国立民族学博物館研究年報』（1999-2012）及び「標本資料詳細情報データベース」（2023 年 5 月 25 日最終閲覧）より筆者作成

表 14 1997 年度中華人民共和国における中国の民具蒐集（1997 年 9 月 16 日～10 月 15 日）

蒐集時期	蒐集地域		標本資料名		備考 (使用者／民族)
9 月 18 日	新疆ウイグル（維吾爾）自治区 イリ・カザフ（伊犁哈薩克）自治州 タルバガタイ（塔城）地区 ホボクサル・モンゴル（和布克賽爾蒙古）族自治県	ナランボラク牧場	〔家具〕	天幕（包）、敷物、物入れ袋、物入れ箱（蓋付き）	モンゴル族
			〔調理用具〕	木臼、石臼、杵、発酵乳製作用皮袋、発酵乳製作用攪拌棒	
			〔飲食用具〕	かぎたばこ用臼、だん茶入れ袋、酸乳入れ袋、乳製品容器（蓋付き）	
			〔服物〕	女性用上衣、男性用コート（冬用）・ズボン（冬用）・靴下、上衣（寝間着）、ズボン（寝間着）	
			〔紡織色染〕	毛糸（羊毛）	
			〔畜産用具〕	鞭、振り分け袋、搾乳用桶（蓋付き）	
		ブストウンゲ牧場	〔家具〕	敷物	モンゴル族
			〔調理用具〕	チーズ乾燥用板、塩入れ袋、粉入れ袋（匙付き）、発酵乳製作用袋、発酵乳製作用攪拌棒	
			〔飲食用具〕	碗、かぎたばこ用臼、だん茶入れ袋、乳製品入れ袋、発酵乳入れ容器、乳酒入れ容器（蓋付き）、馬乳入れ容器、馬乳酒入れ容器	
			〔畜産用具〕	搾乳用桶、馬の搾乳用桶、ラクダ用鞍、犬用えさ箱	
イフオドボラク牧場		〔家具〕	物入れ箱、フェルト製作用すだれ、衣類入れ袋、物入れ袋、タンス（木箱）用架台	モンゴル族	
		〔調理用具〕	五徳、ひしゃく、発酵乳製作用桶（蓋付き）、発酵乳製作用攪拌棒		
	〔服物〕	女性用上衣・ベルト・ベスト（婚礼用）・スカート（婚礼用）・帽子（婚礼用）、男性用ベスト・上衣			
	〔狩猟用具〕	わな			
	〔紡織色染〕	織機			
	〔畜産用具〕	馬用足かせ、馬つなぎ用縄、馬用鞭			
バガオドボラク牧場	〔家具〕	枕、物入れ袋	モンゴル族		
	〔調理用具〕	蒸留装置用筒（酒づくり用）			
	〔飲食用具〕	碗入れ袋、喫煙具入れ袋			
	〔服物〕	男性用ズボン・帽子、女性用帽子			
	〔履物〕	男性用靴（冬用）			
	〔装身具〕	髪飾り			
9 月 18 日	新疆ウイグル（維吾爾）自治区 ウルムチ（烏魯木齊）市	〔紡織色染〕	紡錘、裁縫用具入れ袋	ウイグル族	
		〔畜産用具〕	騎馬用鞍、おもがい（馬具）、鞍敷き（馬具）、腹帯（馬具）、なげなわ		
	新疆ウイグル（維吾爾）自治区 イリ・カザフ（伊犁哈薩克）自治州 タルバガタイ（塔城）地区	〔服物〕	女性用帽子	カザフ族	
		〔家具〕	敷物、壁かけ、クッションカバー		
	新疆ウイグル（維吾爾）自治区 イリ・カザフ（伊犁哈薩克）自治州 タルバガタイ（塔城）地区	〔服物〕	女性用帽子・ベスト、男性用帽子	カザフ族	
		〔家具〕	敷物、壁かけ、クッションカバー		

9月18日	内モンゴル（内蒙古）自治区 イフジョー（伊克昭）盟	〔信仰・行事〕	幡	モンゴル族
	内モンゴル（内蒙古）自治区 イフジョー（伊克昭）盟 ハンギン（杭錦）旗 サインタイク村	〔家具〕 〔食食用具〕 〔畜産用具〕	物入れ袋、物入れ籠、洗面器 食物保存用容器 鞭（馬具）、振り分け袋	モンゴル族
	内モンゴル（内蒙古）自治区 イフジョー（伊克昭）盟 オトク（鄂托克）旗 オラントグ	〔家具〕 〔灯火用具〕 〔調理用具〕 〔食食用具〕 〔畜産用具〕 〔交易用具〕	食事用テーブル、敷物 ランプ やかん（蓋付き）、料理用鍋（蓋付き）、茶用臼 椀 振り分け袋 計量枰	モンゴル族
	内モンゴル（内蒙古）自治区 イフジョー（伊克昭）盟 オトク（鄂托克）旗 マーチャンジン（馬場井）	〔家具〕 〔灯火用具〕 〔調理用具〕 〔食食用具〕 〔畜産用具〕	物入れ箱、物入れ袋 火鉢 五徳、ひしゃく、料理用鍋（蓋付き）、やかん（蓋付き） バター油入れ容器（蓋付き）、バター油用 樽、椀、食物保存用容器（蓋付き）、食物入れ袋、だん茶入れ袋 搾乳用桶	モンゴル族
	内モンゴル（内蒙古）自治区 イフジョー（伊克昭）盟 オトク（鄂托克）前旗 ミヤンガトン村	〔調理用具〕 〔楽器〕 〔祈願品〕	やかん（蓋付き） 宗教儀礼用ラッパ、チベット仏教用太鼓 数珠	モンゴル族
	内モンゴル（内蒙古）自治区 イフジョー（伊克昭）盟 ウーシン（烏審）旗 バヤンウンドゥル	〔家具〕 〔食食用具〕 〔畜産用具〕 〔楽器〕	敷物（絨毯）、物入れ袋 食物保存用容器（蓋付き） 騎馬用鞍、鞍敷き（馬具）、おもがい（馬具） 宗教儀礼用ラッパ・シンバル・ドラ	モンゴル族
	内モンゴル（内蒙古）自治区 イフジョー（伊克昭）盟 ウーシン（烏審）旗 ブサイ村	〔灯火用具〕 〔調理用具〕 〔畜産用具〕 〔交易用具〕	ランプ 料理用へら、ひしゃく、臼 鞭 計量枰	モンゴル族
	内モンゴル（内蒙古）自治区 イフジョー（伊克昭）盟 ウーシン（烏審）旗 トルゴイ村	〔家具〕 〔調理用具〕 〔食食用具〕 〔装身具〕 〔衛生保健用具〕 〔畜産用具〕	盆、敷物、物入れ箱（蓋付き）、物入れ袋 包丁、水汲み用ひしゃく、穴あきひしゃく、臼、杵、鍋（蓋付き）、バター油製作用攪拌棒・桶（蓋付き） 小麦粉入れ箱（蓋付き）、食物保存用容器（蓋付き）、薬飲ませ用具 かばん 蠅払い 騎馬用鞍、おもがい（馬具）、山羊搾乳用桶、搾乳用桶	モンゴル族
	内モンゴル（内蒙古）自治区 イフジョー（伊克昭）盟 ウーシン（烏審）旗 バヤンシル	〔調理用具〕 〔食食用具〕 〔農具〕 〔畜産用具〕	ひしゃく 椀、食物保存用籠（蓋付き） 鋤 搾乳用桶	モンゴル族
	内モンゴル（内蒙古）自治区 イフジョー（伊克昭）盟 ウーシン（烏審）旗 スシフル	〔家具〕 〔調理用具〕 〔食食用具〕	敷物、物入れ袋 バター油入れ容器（蓋付き）、水さし（蓋付き） 椀、食物保存用容器（蓋付き）、食物入れ箱（蓋付き）、だん茶入れ袋	モンゴル族
	内モンゴル（内蒙古）自治区 イフジョー（伊克昭）盟 ジュンガル（準格爾）旗 ミャオハオ（廟壕）	〔調理用具〕 〔食食用具〕 〔畜産用具〕 〔交易用具〕	鍋（蓋付き） だん茶入れ袋、食物入れ袋 牛用手綱、おもがい（馬具） 財布	モンゴル族
	内モンゴル（内蒙古）自治区 イフジョー（伊克昭）盟 ジュンガル（準格爾）旗 ホヤクト村	〔灯火用具〕 〔調理用具〕 〔食食用具〕 〔衛生保健用具〕 〔農具〕 〔畜産用具〕 〔交易用具〕	ランプ ひしゃく、チーズ原料用押し出し機 食物保存用容器（蓋付き）、食物入れ籠 蠅払い 手鍛 羊毛梳き具、騎馬用鞭、馬用足かせ 計量枰	モンゴル族

9月18日	内モンゴル（内蒙古）自治区 イフジョー（伊克昭）盟 エジンホロ（伊金霍洛）旗 ホンハイズ（紅海子）村	〔家具〕 〔食食用具〕	敷物、食器棚、テーブル（引き出し付き）、タンス（蓋付き）、食器入れ箱（引き出し付き） 酒入れ容器、バター油入れ容器（蓋付き）	モンゴル族
	内モンゴル（内蒙古）自治区 イフジョー（伊克昭）盟 エジンホロ（伊金霍洛）旗 サンゲ村	〔調理用具〕 〔食食用具〕 〔農具〕 〔畜産用具〕	木臼、杵 たばこ用パイプ、はし入れ箱、野菜入れ籠、穀粉入れ籠、乳製品入れ容器 手鋏 羊毛梳き具、放牧用投石具、鞭	モンゴル族
	内モンゴル（内蒙古）自治区 ジェリム（哲里木）盟 ホルチン（科爾沁）左翼後旗 ハルグソム オルタラガチャ	〔家具〕 〔調理用具〕 〔食食用具〕 〔装身具〕 〔狩猟用具〕	化粧品箱（蓋付き）、アイロン 味噌作り用攪拌棒、チーズ用型 キセル 耳あて（防寒用） 狩猟用投げ棒、家畜用杭	モンゴル族
	内モンゴル（内蒙古）自治区 ジェリム（哲里木）盟 ホルチン（科爾沁）左翼後旗 エメールソム	〔娯楽遊戯〕 〔食食用具〕 〔育児用具〕 〔衛生保健用具〕 〔狩猟用具〕	娯楽用品（駒）（箱付き） 喫煙具入れ袋 子供用枕飾り 蠅払い 狩猟用投げ棒（先端部のみ）	モンゴル族
	内モンゴル（内蒙古）自治区 ジェリム（哲里木）盟 ホルチン（科爾沁）左翼後旗 エメールソム バインオド ガチャ	〔農具〕	とうもろこし脱粒具	モンゴル族
	内モンゴル（内蒙古）自治区 ジェリム（哲里木）盟 ホルチン（科爾沁）左翼後旗 バヤスガラソム	〔調理用具〕	味噌作り用ひしゃく	モンゴル族
	内モンゴル（内蒙古）自治区 ジェリム（哲里木）盟 ホルチン（科爾沁）左翼後旗	〔衛生保健用具〕	羽ぼうき	モンゴル族
	内モンゴル（内蒙古）自治区 アラシャン盟	〔玩具〕	玩具（知恵の輪）	モンゴル族
	黒龍江省 ハルビン（哈爾濱）市	〔調理用具〕	菓子型	オロス族
	山西省 定襄県 河辺鎮 河一村	〔調理用具〕	製麺機	漢族
10月8日	雲南省 大理白族自治州 大理市 城邑郷	〔家具〕	ごみ入れ籠	白族
		〔調理用具〕 〔食食用具〕 〔履物〕 〔農具〕 〔漁撈用具〕 〔その他特種職業用具〕 〔運搬具〕 〔祈願品〕	鍋蓋、米研ぎ用箕、杓子、箕、蒸籠 洗い用・鍋洗い用ブラシ 喫煙用パイプ・煙管*、麵入れ籠 わらじ トウモロコシ用・米用・大豆用・砂用・穀物用・空豆用 ふるい びく、ドジョウ入れ籠 石工用工具（籠、墨壺、金槌、のみ、定規、背負い具、メジャー） 手提げ籠（買い物籠）、自転車用籠、土砂用背負い籠、背負い紐 女性用数珠	*白族および雲南省各民族
	雲南省 大理白族自治州 大理市	〔服物〕 〔食食用具〕	蓑 水パイプ	白族 白族及び納西族 大理市白族とその他一般人（観光客など）
		未分類 未分類	室内装飾用置物、植木鉢 花瓶、容器（龍鳳石葫芦）、工芸画（箱付き）	
	雲南省 昆明市	〔装身具〕	頭飾り	彝族のサブ・グループサニ族 白族のサブ・グループ勐墨（ルームー）、傈僳族 民族不明 白族
		〔狩猟用具〕	弩用 矢筒・矢	
	雲南省 大理白族自治州 大理市 市郊郷	未分類 未分類	対聯集（本） 民間信仰神像画（複製）	
		〔服物〕 〔履物〕 〔装身具〕	女性用前掛け・ズボン・ベスト・腰帯・上衣 女性用靴 女性用頭飾り・腰飾り・背飾り	彝族
	雲南省 大理白族自治州 大理市 喜洲鎮	〔家具〕	盆（木托盆）、洗面器置き台、枕、木彫板（扉の一部）、柱飾り板（福寿文様）	

10月8日				〔灯火用具〕 〔調理用具〕 〔飲食用具〕 〔服物〕 〔履物〕 〔装身具〕 〔育児用具〕 〔農具〕 〔漁撈用具〕 〔紡織色染〕* 〔畜産用具〕 〔交易用具〕 〔その他特種職業用具〕 〔運搬具〕 〔報知具〕 〔信仰・行事〕	ふいご、火吹き竹 漢方薬煎じ用鍋、土鍋、蒸籠、餅菓子型、石臼、すり鉢（すり石付き） 箸立て、食器籠、喫煙用煙管、焙じ茶用焙じ容器 女性用上衣・前掛け・ベスト 女性用刺繡靴 女性用胸飾り・頭飾り、女性用肩掛け袋、スカーフ 乳児用背負い帯 穀物ならし具、土砕き具、打穀棒、鉄製熊手、農具（フォーク）、鍬、除草具、箕 四つ手網漁用漁具・漁網、流し刺網漁用 漁網、稚魚用養殖網、捕魚器、たも網、魚売り用籠、漁網用餌おき台、水草刈り具、網針（漁網編み具）、魚入れ籠、魚伏せ籠、やすのれん、カーテン（製作途中）、ハンカチ、枕カバー、ベッドカバー、テーブルかけ、化学染料絞り染め布わらじ作り具、頭絡（馬頭套）、くつわ（馬銜）、馬用 鞍、あぶみ（脚踏縄） 棹秤 のみ（石工用工具）、のみ（大工道具）、大工道具用籠、大工道具（定規、鉋、墨壺、金槌、ドリル、鋸、錐、斧）、こて（左官用具）、はさみ、縄ない具 背負い具、背負い籠、背負い運搬具、手提げ籠、櫛 来客鳴らし板 文書（疏）、護符（甲馬紙）用版木、護符（甲馬紙）、位牌入れ（神龕）八卦図（東地北月西天南日）、香入れ箱、香用匙、香	白族 *白族と一般観光客
	雲南省 大理白族自治州 大理市 湾橋郷		〔その他特種職業用具〕	木彫工具置き箱、木彫用工具（木槌、のみ）	白族	
	雲南省 怒江傈僳族自治州 福貢県 架科底郷		〔飲食用具〕 〔服物〕 〔装身具〕 〔農具〕 〔狩猟用具〕 楽器 情報不足、未分類	水飲み用容器（蓋付き） 女性用ベスト・スカート 女性用頭飾り・首飾り、肩掛け袋 犁 狩猟用弩 弦楽器（琵琶） 刀（鞘付き）	傈僳族	
	雲南省 怒江傈僳族自治州 福貢県 匹河郷		〔調理用具〕 〔服物〕 〔装身具〕 〔農具〕 〔狩猟用具〕 〔紡織色染〕 〔運搬具〕	石臼、石臼用受け皿、石臼用置き台、ふるい 女性用上衣・スカート 女性用肩掛け袋 犁、種入れ籠（蓋付き） 弩用矢・矢筒（蓋付き）、矢製作用刀 麻糸、糸巻き具 背負い籠	怒族	
	雲南省 大理白族自治州 大理市 挖色郷		〔服物〕	女性用上衣・前掛け・ベスト・花嫁衣装	白族	
	雲南省 大理白族自治州 洱源县 江尾郷		〔漁撈用具〕 〔信仰・行事〕	漁網編み具、網針、巻き貝捕り網、筌 護符（甲馬紙）、護符（甲馬紙）用版木	白族	
	雲南省 迪慶藏族自治州 維西県 巴迪郷		〔狩猟用具〕	狩猟用弩	傈僳族	
	雲南省 怒江傈僳族自治州 瀘水県 洛本卓郷		〔服物〕 〔装身具〕 〔紡織色染〕 〔山樵用具〕	女性用上衣・スカート、男性用上衣、女性用腰帯 女性用肩掛け袋 衣服製作用麻布、織り具（篋）・（綜統） 柴刈り用刀	白族のサブ・グループ勐墨（ルムー）	

		〔狩猟用具〕 情報不足、未分類	狩猟用弩 男性用刀（鞘付き）、帯刀用鞘	
	雲南省 怒江傈僳族自治州 瀘水県 六庫鎮	〔運搬具〕	背負い運搬用背当て着	傈僳族
10月11日	北京市	〔服物〕 〔装身具〕 〔紡織色染〕 〔信仰・行事〕 情報不足、未分類	腰帯 肩掛け袋 ろうけつ染め布、絞り藍染めテーブルかけ 切り紙細工、グリーティングカード（クリスマス・年賀用） 短刀（箱付き）	サニ（撒尼）族、一般観光客 サニ族、一般観光客 白族、一般観光客 民族不明 モンゴル族、一般観光客
記載無し	海南省 通什市	〔装身具〕 〔交易用具〕	肩掛け袋 財布	海南島苗族 海南島苗族および一般人
	雲南省 怒江傈僳族自治州	〔装身具〕	肩掛け袋	傈僳族、怒族

『民博通信』No. 79（1997年12月）及び「みんぱく標本資料詳細情報データベース」（2023年5月23日最終閲覧）より筆者作成

表 15 韓敏による中華人民共和国における中国の民具蒐集（2008年度～2012年度）

蒐集時期		蒐集地域	備考
2008年度	2008年7月20日～8月13日 2008年12月25日～2009年1月2日	雲南省昆明市、騰冲、遼寧省瀋陽市、安徽省、北京市 遼寧省瀋陽市	一人で蒐集を行う、または、中国の雲南民族大学、宿州学院の研究者及び現地の協力者に同行してもらう
2009年度	2009年2月17日～2月24日 2009年7月27日～8月2日 2010年3月19日～3月25日	安徽省宿州市、遼寧省瀋陽市、福建省泉州市、上海市	中国の宿州学院、上海交通大学、上海師範大学、泉州海外交通史博物館の研究者及び現地の協力者に同行してもらう
2010年度	2010年8月7日～8月25日 2011年3月17日～3月20日	内モンゴル自治区ハイラル市、遼寧省瀋陽市、上海市、福建省	一人で蒐集を行う、または、中国の中央民族大学、泉州海外交通史博物館の研究者及び現地の協力者に同行してもらう
2012年度	2012年12月6日～12月12日 2013年3月24日～3月29日	上海市、福建省廈門市・泉州市・石獅市・晋江市・永安市・安溪県	中国の上海交通大学、上海市師範大学、廈門大学、廈門社会科学院の研究者及び現地の協力者に同行してもらう

『国立民族学博物館研究年報』（2008-2012）及び韓敏氏にメールにてご教示いただいたものより筆者作成

表 16 2014 年リニューアルした後の中国地域の文化（展示資料）

展示セクション	資料種類・名	蒐集・製作地域	備考（使用者／民族）
生業	製麺機 バター茶作り桶 鵜飼い漁用船	山西省定襄県 チベット自治区ラサ市 湖北省当陽市	漢族 藏族 漢族
民族楽器	葫蘆絲 板胡	雲南省昆明市 北京市	漢族ほか
チワン族の高床式住居			
装い	裕固族衣装（青年女性用盛装） 蒙古族衣装（男性用盛装） ウズベク（烏孜別克）族衣装（男性用盛装） チャン（羌）族衣装（青年女性用盛装） 珞巴族衣装（男性用盛装） 苗族衣装（女性用盛装） 瑶族衣装（男性用盛装）	甘肅省肅南県 内モンゴル自治区 新疆ウイグル自治区 四川省茂県 チベット自治区ニンティ地区 貴州省雷山県 閩東省連南県	
工芸	農民画「菓草採りの娘」 酒入れ容器 女兒用首飾り プロバガンダポスター バッジ（毛沢東）	上海市 四川省喜徳県 貴州省台江県 北京市 遼寧省瀋陽市	漢族 彝族 苗族 漢族 漢族ほか
台湾原住民族	バイワン（排湾）族の衣装（女性用） タイヤル（泰雅）族の衣装（女性用） 男性用上着 バナナ繊維上着 連杯 椅子	台東県 苗栗県 花蓮県 屏東県	排湾族 泰雅族 泰雅族 クヴァラン（噶瑪蘭）族 排湾族 排湾族
宗教と文字	甲馬紙（神像版画） シーサンパンナ（西双版纳）旧タイ文字 経典 持仏入れ 下げ飾り トンパ経典 讃美歌が響く村の教会（写真パネル）	雲南省大理市 雲南省景洪市 チベット自治区 雲南省大理市 雲南省ジャングリラ（香格里拉）県 雲南省福貢県	白族 傣族 藏族 回族 納西族
華僑・華人	19世紀末～20世紀前半 アジア諸国への移住（パネル展示） 南方獅子 風水八卦鏡（スペイン語版） 雷音三太子 冥宅	北京市 アメリカ合衆国 台北 アメリカ合衆国	
継承される伝統中国	紙銭 位牌 花嫁の輿 夫婦円満・子孫繁栄を願う嫁入り道具のミニチュア 族譜「韶山毛氏族譜」	福建省泉州市 福建省石獅市 安徽省宿州市 上海市	漢族 漢族 漢族 漢族

『国立民族学博物館展示案内』（2017）より筆者作成